
ゼロの使い魔-893の使いっぱしりが転生したら-

Postal Dude

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 893の使いっぱしりが転生したら -

【Nコード】

N5483Y

【作者名】

P o s t a l D u d e

【あらすじ】

転落人生真つ只の小悪党中の小悪党の主人公。

とある失敗で命を落とし、目が覚めれば赤ん坊になっていた。

ゼロの使い魔二次創作。 転生モノです。

チートあり、原作絡みあり・・・の予定。

たまに挿絵入ります。感想くれると神棚に飾って一生大事にします。見るに耐えない駄文ではございますが、どうか温かい目で見てやってください。

前世

マズい。

酸素不足の脳みそが危険信号を点滅させている。

海水でずぶ濡れの冷えているはずの体は蒸気が出そうなくらい熱い。自分の呼吸の音と鼓動がやけに大きく聞こえて、耳がおかしくなりそうだった。

涎が垂れ、汗を撒き散らし、膝は大笑いしている。

もう限界が近いな、とやけに冷静に思ってしまった。

怒声。

随分と近くなってきた、景気のいい複数の怒鳴り声。

自分の母国語である日本語はもちろん、聞き覚えのある他国の言葉が入れ混じっている。

中国語だろうか。それとも韓国語？

追い詰められた脳みそが、怒声に混じる異国語に思いを馳せる。

残念ながら自分は大学はおろか、高校すらまともに卒業していない出来の悪いおつむのため、異国語を理解する脳はない。

それどころか、母国語すら不安だ。

くだらない人生だったなあ、とふと思ってしまう。

勉強もろくにせず、まともな大人にもなれず。

きちんと勉強していれば、背後から聞こえる異国語も理解できたのだろうか。

いや、きちんと勉強していれば、こんな怒声を聞く機会など無かつただろう。

怒声。怒声。銃声。

乾いた破裂音が人の声に混じって聞こえたと同時に、視界が大きく揺れた。

まるでそこに元から無かったかのように、足の力が消失する。

一瞬、浮遊感に襲われ、慣性の法則に導かれるまま、ひび割れたアスファルトに熱いキスをした。

まさか、ハジキを使うなんてよお。

うつ伏せになったまま、役目を終えようとしている脳みそで考える。撃たれたはずの右わき腹も、派手にアスファルトに擦り付けた顔面も全く痛くない。

ただ、体の奥から発せられる熱さとは別種の攻撃的な熱さが、じくじくと沸いている。

もうちつと、鬼ごっこ付き合ってくれりゃあ、こっちから降参してやるのに。

食いしばった歯から力が抜ける。

熱かったはずの体の熱が、すつと抜けていく。まるで、魂が抜けるみたいだった。

> i 3 5 1 4 1 — 4 4 1 1 <

ホント、くだらん人生だった。

次、生まれてくるときはちゃんと生きてえなあ・・・。

口の端からゆるゆると垂れているのは、血なのか涎なのか。

もう知るすべはないし、知る意味も無かった。

耳鳴りがやけに大きくなる。これが天使の迎えの声だとするなら、

ひどく不愉快だ。

不愉快な天使の迎えの声の中、もう一度、銃声を聞いた。

前世（後書き）

これから連載を開始します。どうかよろしく願っています。

転生

白い天井。

病院の天井とは少し違うような気がした。

痛みや、疲労感はなく無い。しかし、からだは殆ど自由が利かない。

助かったのか？

あの状況でどうやって助かったんだ。

まさか、正義のヒーローでもやってきたのか？

想像して大笑いしそうになる。

正義のヒーローが裁くのはあの連中じゃなく、自分のはずだ。

いや、あの連中も相当なモンだろうから、自分とアイツら両方裁かれなくてはならない。

つまり、正義のヒーローなんて酔狂なものが存在したとして、

ヒーローは自分と彼らの追いかけてを眺めていることがベストな選択となるわけだ。

あとは、残ったほうを殲滅すればいい。

「おお、目を覚ましたか！」

聞いたことが無い声だ。

低くてハリのある、女性が聞けばついうつとりしてしまうかのような男性の美声。

何とか動く首をひねり、声の方向を向こうとする。

木で檻のような柵の向こうの豪華な木製の扉が開き、欧米人風の男が笑顔で両手を広げていた。

それを見て、違和感を覚える。

いくら欧米人が日本人よりも大きいからと言って、あれだけ大きい

のだろうか。

いや、それよりも周りにあるものが全て大きく見える。まるで、自分が小さくなったような。

「おかえりなさい、あなた。抱いてみますか？」

欧米人風の大男とは逆方向、自分の背後で女性の声がした。女性にしては低めの、ハスキーボイス。

姿を確認しようとして、首を動かそうとするが、それより先に大きな手が自分を抱えあげた。

「ルノー、あれが父様ですよ」

流れるような金髪の女性の大きな顔がにっこりと笑う。

高い鼻に、大きな灰色の目。薄くて桃色の唇。

頬に少しあるそばかすも含めて、スクリーンの中から飛び出してきたような美人だった。

「ルノー、父様だよ」

すぐに女性の手から男性の手へ移された。

女性のほうとは違い、服の上からでも確認できるほど逞しい筋肉に抱かれる。

男性の髪も女性と同じ、金髪だったが、彼の目は緑色だった。

熊を思わせるようなごつごつとした顔に、髪と同じ色の髭。

立派な眉がハの字に下がり、意志の強そうな瞳が閉じられ、目じりにしわがよる。

人懐っこそうな笑顔だ。自分も釣られて笑顔になりそうになる。

いや、待て。

おいおい。

どうなってるんだ、これ。

何で、自分と同じくらいのおっサン、しかも外人が俺を抱えて笑ってる？

あまりの状況に停止しかけていた脳が回転を始める。

首を少し動かし、自分の体を見る。

ごつごつした手の甲ではなく、触ると気持ちよさそうなぷにぷにした手の甲。

薄汚れた安っぽい指輪のつけた細い指ではなく、短く、ふくよかな指。

まるで赤ん坊のような。

「・・・あー」

声を上げた。俺はどうしたのか聞きたかったからだ。

しかし、声帯を震わせたのはどこかマヌケな声。

男性にしては高い声だとよく言われた、聞きなれた声ではない。

「お、父様だぞ。分かるかなー？」

まるで子供をあやす様に男性が覗き込みながら自分を見る。

・・・子供？

首を捻る。子供だ。

自分はまるで赤ん坊のようだ。

この外国人の男女の反応も、まるで今生まれた赤ん坊に接するような反応だ。

まさか。

ある予想が脳裏をよぎる。
よぎってから、また大笑いしそうになった。余りにも荒唐無稽だった。

来世。生まれ変わり。

意識の途切れる間際、自分が想像した、ありえない未来。

いや。

否定を打ち消す。ありえない未来じゃない。

生まれ変わったと考えるなら、全て納得がいく。

変わってしまった自分の手。手どころじゃなく、体全体だろう。

自分を見て幸せいつぱいの笑みを浮かべる、外国人の男女。

見たこともない天井に、自分の生活レベルでは手が出ないであろう、豪奢な家具。

あの状況から助かった可能性と、この事実を含めた生まれ変わりという可能性。

どっちのほうが高いだろうか。

・・・頭の悪い自分でもどちらに天秤が傾くか、直ぐに理解できる。

木製の檻、いやベビーベッドで聞き耳を立てた話だ。

自分は今、トリスティン王国の『ド・ヴォージュ』という地域に生まれたらしい。

どちらも聞いたことの無い地名だった。自分が無学かもしれないが、それから、二人の男女の名前。

男性の方はオーギュストというらしい。名前の響きどおり、体格のいい髭の良く似合う男性だ。

女性のほうはエジェリーというらしい。名前の響きどおり……なのかどうかは置いておいて

有名映画女優のように可憐で、女性らしい女性だ。彼女の笑顔は、美しいな薔薇が咲いたみたいだった。

この辺りはまだ、理解できる。しかし、会話の半数を占める『魔法』という言葉が引くかかる。

「ルノーは魔法の才があるだろうか」

「義祖父様の血を引いていれば、凄いいし手になるでしょうに」
両親はしきりに自分の『魔法の才能』を気にしていた。

自分は魔法なんて知らない。

魔法を使えるなんてホザくヤツはキ。ガイが詐欺師だけだ。

それでも。

さも当然かの用に飛び交う、魔法の話。

いや、話だけじゃなかった。

母親、エジェリーがファンタジー映画に出てくるようなロッドを振ると、ポルターガイストの

ように、ふわりと哺乳瓶やおもちやが浮くのだ。

飛ぶはずの無い木製の小鳥がふわふわと浮き、自分をあやす。

今のこの年齢は0歳だろうが、元々の年齢は28歳だ。

28にもなったオッサンが、小鳥如きに喜ぶはずも無いが、女性を無為に悲しませるのは心が痛い。

きやつきやと笑ってやると、女性も幸せそうに微笑んだ。

どうやら、地名を知らないのは自分の無学が原因ではないようだ。
東京大学出身の天才でも、世界一のお医者でも、聞いたことの無い

知名だと首を傾げるだろう。
ここは。

笑ってしまいそうな話だが。
ここは異世界らしかった。

環境

2年と少しがたった。もう少しで自分は3歳になるらしい。何の問題も無く育ち、歩けるようになって随分たった。

まだ外の世界といえは庭だけだが、随分と了見が広まったような気がする。

「ルノー、エジエリー。帰ったよ」

「おかえりなさい、とおさま！」

出かけていた父親が呼ぶと、よたよたと近づいていつてやる。脇から抱えるように自分を持ち上げ、父親、オーギュストが破顔する。

中身は28歳のオッサンですよ。しかも東洋人・・・だなんて口が裂けてもいえない。

「今日も土産を買ってきてやったぞ」
「ほんと？」

よく父親に本をねだるようになっていた。理由は色々ある。

字をもっと早く覚えるため。

この世界を知るため。

―両親に、褒めてもらうため。

28年、いや、家を出て12年だから、16年か。

16年一緒に住んでいた親よりも、こっちの親のほうが愛情を感じる。

メシさえ食わせていれば勝手に育つだろうと、全くかまってくれな

かった、前の両親。

半分以上は自分のせいなのだが、こっちの親と、つい比べてしまっ
いざ比べてしまえば、どちらに愛情を感じるかは明白だろう。

鏡を見た感じ、前の自分よりも顔がいいし、若いせいもあるだろう
が中々にこの体は覚えが早い。

神様ありがとうと唱えながら、児童向けの絵本を読む毎日だ。

「ルノーはホント、本が好きねえ」

「ええ。かあさま。もつとほんをよんで、かあさまとおさまに、
ごおんをおかえします！」

「ご恩？面白い事を言う子だ」

はっはっはと父親が豪快に笑う。

それに釣られて、母親もくすくすと笑い、自分も笑う。

理想の家庭環境だとふと思い、なんだか胸がくすぐったくなった。

家庭環境といえば。

自分の名前は正確には『ルノー・ド・ヴォージュ』というらしい。

『ド・ヴォージュ』。

ヴォージュ領の、という意味らしく、父親はド・ヴォージュの領主
だ。

領主。つまるところ、貴族らしい。

貴族だとか、この豪華な家だとか、中世ヨーロッパみたいだな、と
思うが、まさにそうだった。

電気なんて便利なものは無いし、移動は車ではなく馬。

兵士は銃ではなく、槍や剣を握り、司令官は伝令室で無線機を持つ
のではなく、魔法の杖を持つらしい。

自分の前世は夢だったんではないかと笑いそうになるが、

前世『赤木圭一』の死に際の、あの暗い視界は夢なんかではなく、本物だ。

思い出しただけで身震いがする。

『貴族とは、誇り高く、領民を愛し、国に忠誠を誓わねばならん』

よく父はそう自分に言い聞かせた。

なるほど確かに。兄貴分っていうのは弟分にいつも気を払うべきだし、兄貴分のもっと上、

親分には忠誠を誓わなければならない。

うちんとこの兄貴文も気を払ってくれりゃあな、と前世を思い出して笑いそうになるが、

気を払ってくれなかったお陰で、金持ちで、しかも理想の家庭に生まれてこれたのだから、

世の中面白いものだと思う。

疑問

「今日は少し難しめの本だが、読めるかな？」

父親は自分にそう問いかけた。

言葉は直ぐに理解できたが、都合よく字も理解できるというわけには無いらしく、

まだ読めない字も多い。

タイトルをたどたどしく目で追うと、読めないような字は無く、そんなに読むことができた。

「・・・こどもでもわかる、まほうにゆうもん？」

小首を傾げながら父親に答えを請う。

父親は大きくうんうんと頷いた。

「そうだ。まだ早いかと思ったが、ルノーは本や字が好きだからな。少しくらい触れていても問題は無いだろうと思ったんだが・・・」

ちらりと父親が自分の後ろの母親に視線を向ける。

『早いですよ、あなた』と怒られるかも、と思つての反応だろうか。この熊みたいな男は、自分の妻にはめっぽう弱いらしかった。

「いいんじゃないですか、あなた」

「エジェリーもそう思うか！」

嬉しそうに父親が破顔する。いつ見ても人のよさそうな顔だ。

「ルノー、しっかり勉強するんだぞ」

「はい、とおさま」

大きな手が伸びてきて、わしゃわしゃと自分の頭を撫でた。

「すまんかエジェリー、俺はグラモン元帥の所へ行かなきゃいかん」
「あら、どうしたの」

「元帥の四男の3歳の誕生パーティーらしい。ルノーもエジェリーも連れて行きたかったが・・・」

まだこの年だと社交界は無理だろう」

「そうですね、あなた・・・少し考えていたんですけど、家庭教師をつけてはどうでしょう？」

「家庭教師か・・・。楽器も魔法も社交も覚えさせなきゃいけないしな。悪くないかもしれん。」

使用人も雇っていないし、エジェリー一人にさせるのも限界か」

よし、と父親は小さく頷いた。

「ルノー」

「はい、なんでしょうか」

「近いうちに家庭教師をつけようと思う」

家庭教師をつけるか。

勉強嫌いな自分にはえらく嫌な言葉だが、首を横に振るわけにはいかないだろう。

「あなた、家庭教師って言っても、ルノーはまだわかりませんよ？」
「おお、そうだったか」

家庭教師という前世の自分とは全く関係の無い話に面食らっていたのを、戸惑っていると勘違いした

母親がフォローを入れた。

話をあわせるために、申し訳なさそうに「ごめんなさい」と付け加える。

「ルノー、いつも母様から、色々教わっているな？」

「はい」

「その母様の代わりに、別の人がルノーに勉強を覚えてくれるんだ。寂しい話じゃない。母様もちゃんと家にいるし、母様だってずっとルノーにかまいつきり、

というわけにもいかんだ。ルノー。父様のいうことを聞けるな？」

「はい、とおさま」

そう言うのと、もう一度わしゃわしゃと頭を撫でられた。

「よし、いい子だ。もっといい子にすれば社交パーティーにも出ることが出来る。」

グラモン元帥という偉い人の子供が、ルノーと同年なのだ。

・・・たしか、ギーシュと言ったかな。彼に会うために、失礼の無い態度をを勉強するんだぞ」

言い残すと、外套をなびかせて、父親がドアを開き出てゆく。

ばたん、と大きな音がした。

「ねえかあさま」

振り返り、母親に問いかける。

「なあに、ルノー」

微笑みながら母親が答える。

「ぐらもんげんすいて、だれですか？」

母親は少し困ったような顔をして、長くなるから、と部屋に招き入れた。

才能

「グラモン元帥はね・・・何ていうのかしら、ルノーに分かるように説明したいんだけど・・・」

「わかりますよ！ほんをたくさんよんでますから！」

母親が紅茶をすする。

それに習い、自分も母親が淹れてくれた紅茶をすすった。

紅茶の味が分かるなんて、教養のある自分ではないが、それでもいいものだと思う。

独特の香が鼻腔を攪り、苦味に混じった優しい甘さが味蕾を通り過ぎる。

「そう。じゃあ説明するわね」

くすくすと母親が笑いながら話を始めた。
長い長い話だった。

要約すると。

この領地、ド・ヴォージュは父親のものではないらしい。

父親の祖父、ジェルマンがド・グラモン伯爵から戦績を称えられ、『委託』されたものだそうだ。

ド・ヴォージュ領は、つまり、ド・グラモン領地内ということだ。
使用人がいないのも、広くはあるものの自分の想像する貴族の住む邸宅に比べると小さいのも
それで納得がいく。

ド・ヴォージュは貧乏貴族なのだ。

母親は、少し弁明するように『それでも、雇われるだけの貧乏貴族

より随分ましよ』と加えていた。

父親が軍人なのは知っていたが、そういった事情までは知らなかった。

軍部所属の父は元帥たるグラモン伯に頭が上がらなくて当然なのだ。

両親は共にそこまで魔法の才に恵まれていなかったらしく、また戦果を挙げ、ド・グラモン領から

完全に独立することは恐らく無理だろう、と言った。少し難しい話ねと付け加えながら。

だからか。

自分に、ルノーに魔法の才能があるかどうかしきりに気にしていたのは。

自分を、グラモン元帥の四男に会わせる事に慎重になっていたのは。

「難しい話でしたね。まだ理解できなくても大丈夫よ、ルノー」

母親は少し複雑そうな顔で空になったカップを持ちながら言った。何も言わず頷くと、満足げに目じりを下げる。

「今日は遅くなりましたね。魔法の本を読むのはまた明日から。父様も、私もあなたの飲み込みの早さには舌をまいています。

おやすみなさい」

自分を寝かしつけると、母親が扉をゆっくり閉めた。

魔法の光で灯る明かりが、優しく部屋を照らしていた。

家庭教師が来たのは3日後だった。

随分と若い、茶髪の女性だった。若いというより、幼かった。何らかの事情があるのだろう。住み込みと言っていた。もしかしたら、親がいないのかもしれない。

名前をアリーヌといい、魔法を使うことが出来るが、貴族ではないらしかった。

緊張した様子で、年は13とか、ド・ヴォージュ家に雇っていただいて光栄だとか言う様は、中身28歳の自分から見ても、組のお偉に初めてあったときのようにだと、ほほえましく思った。

「ルノー坊ちやま、これから、よろしくお願いします」

「よろしく、アリーヌさん」

目の保養としてありがたいが、どうしてこんなに若い人を選んだらうと不思議に思ったが、

給金の問題か、と3日前の話を思い出して苦笑する。

給金の安そうな少女で、魔法が使えて、住み込み可。料理も出来て美人。

これが物件なら、前の住人が自殺でもしたんじゃないかと疑りたくなるくらい良物件だ。

こんな落ち目の家に雇われて、娘っ子も大変なもんだ。

貴族の相手をするということはこんなに気を使うのだろうか。

アリーヌはあちこちで言葉を噛み、時には失敗して、頭が首から転げ落ちそうなくらい頭を下げた。

元貴族でこれだから、平民相手だとどうなるんだろう。

外に出るのが楽しみだと思ひ、窓の外を見る。

ヨーロッパの片田舎のような景色が、優しい太陽に照らされていた。

魔法

1ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、1年が過ぎ――。

家庭教師兼使用人のアリーヌが15になり、自分は5歳になっていた。

ただとどしかった授業も、サボった自分を叱り飛ばすくらい、アリーヌは教師が身につき、

自分も『さん』付けでよんでいたアリーヌを呼び捨てにするまで親しくなっていた。

初めは自分の魔法の才能で貧乏貴族を大貴族に押し上げてやるうかと思っただが、そう現実には

上手くいくわけも無く。自分には魔法の才能が全く無いということが露見していた。

魔法にはクラス分けがある。両親は共に『ライン』というクラスらしい。

一番下は『ドット』。『ライン』はその上なので、結構シヨボい方だと言うわけだ。

シヨボいと言うわけでもないか。普通くらいだ。偏差値50くらいなのだろうか。

このアリーヌのクラスも『ライン』。

その上には『トライアングル』『スクウェア』があるそうで、曾祖父は『スクウェア』だったそうだ。

自分のクラスはもちろん『ドット』。

死ぬほど努力しても『スクウェア』には届かないらしい。……というか、『ライン』も怪しいそうだ。

「坊ちゃん、聞いてますか？」

当時のあどけなさを少し残し、体のラインが女性っぽくなったアリーヌが少し怒ったように問いかける。

「聞いてるよ、アリーヌ」

そう答えると、ホントですか、と小さく呟いて講義に移った。

「坊ちゃま、今日から系統魔法の練習をしたいと思うのですが」

系統魔法。

今の今まで自分がしてきた魔法はこの『系統』とやらに属さない『コモンマジック』という魔法らしい。

魔法の基本だというのが、これが結構便利なもので、物を浮遊させたり、鍵を開け閉めしたりと、随分生活が便利になった。

それと違い、系統魔法は基本からの派生。応用。

土・水・火・風の四つの属性からなる系統魔法——これに『虚無』という伝説の系統が入るらしいが——は人により得意な系統が違う。たとえば、母は『土のラインメイジ』。父は『水のラインメイジ』。アリーヌは『火』らしい。品のいい彼女からは何となく想像がつかない。

「坊ちゃまは魔法以外のお勉強は割りと真面目に聞いてくださって、飲み込みも早いのに、

魔法のお勉強だと急に適当になりますからね・・・。

次、魔法のお勉強をおサボりになって、外に出ようものなら奥様にいいつけますからね？」

ぷんぷんと、アリーヌがお説教をする。彼女が強めに言葉を発する

たび、茶髪の軽くウェーブがかかった髪がふわふわと揺れる。柔らかそうだ。他の授業なら、精神年齢33歳の自分でも直ぐに身につく。しかし魔法はそうもいかず。劣等性だった前世学生時代を思い出して、何となく憂鬱になってサボりたくなってしまうのだった。

系統

「1週間も前のことじゃん。大丈夫だって」

「1週間しかたってないんですっ！もうすぐおサボリ10回目ですよっ！」

15歳の少女に怒られる30オーバーのオッサン。なんともしまりのない光景だ。

・・・見た目は5歳だからセーフだろうが。

「では、系統ごとに坊ちやまの得意系統を見つけましょうか」

こほんと、小さくかわいらしい咳払いをして、少女が小さなロッドを取った。

「ブレイド」

杖に魔力が絡みつき、真つ赤な刃が現れる。

ブレイドという魔法は、使うものによってつく色が違う。

土なら茶色。火なら赤。

「さ、坊ちやまも」

杖に絡み付いていた魔力が霧散して消える。

薦められたとおり、自分も杖を構えて同じようにスペルを読み上げた。

「ブレイド」

薄い魔力がじわじわと杖に絡み付いていく。

無色に近い水色だ。集中を解くと、今すぐにも霧散していきそうだった。

「・・・はぁーっ・・・」

集中を解く。霧散というよりか、フェードアウトと言った感じだった。

ただでさえ色の薄いブレイドの刃がすーっとどんどん透明度を増し、消えていった。

実力の差、だろうか。何だか劣等感に苛まれる自分を、アリーヌが真剣に見ていた。

「水色でしたね。コンデンセーションを唱えてみてくださいな」

これくらい余裕だろう、といった口調でアリーヌが言った。

ラインメイジと比べられちゃ困る。

文句を言ってやろうかと思い、目を向けると『有無を言わさん』と言いたげな目がこつちを見ていた。

どこかで見たことある目だなあ、と苦笑しそうになりながら『凝縮』の呪文を呟いた。

「コンデンセーション」

ぴちゅん、と杖の先からしずくが一つ落ちた。

コンデンセーション。『凝縮』の呪文とは空気中の水分を凝縮する呪文だ。

実力者が唱えれば、魔力の底上げもあり、相当な量の水が出現する。逆に。逆に実力の伴わない者が唱えれば、今みたいなか弱いような結果となる。

「なるほどなるほど。・・・あ、落ち込まないでくださいね、坊ちやま。最初はこんなもんですよ」

別に落ち込んでいるわけじゃない。

私も初めて発火を唱えたときは小さい火花が一粒散っただけで、と続けるアリーヌを尻目に思った。

ただ疲れただけだった。この体の魔力総量は相当に低いらしい。倦怠感と眩暈に似た症状で視界が軽くなすんだ。

「一応、別系統も試してみましようか」

「まだすんの?!」

これだけ疲れた表情の子供にまだ無理を言えというのか。

「お疲れの様子ですから、土系統の基本スペルの『鍊金』だけ、やってみてくださいな」

細い首を軽くかしげてにつこり笑う。つんと上向きにカールしている長いまつげが小さく揺れる。

有無を言わさぬ笑顔だった。やれよこの野郎。

やんなきゃ旦那様に怒られるのは私なんだぞ、と勝手に彼女の心の声を翻訳してやりたくなった。

「では、これを。鉄分を多く含んだ土です」

エプロンのポケットから、あらかじめ用意して合ったのであろう小瓶を取り出し、

中身を紙ナプキンの上に撒く。

色の濃い、虫が好き好んで住処にしそうなく肥えた土だった。

「イル・アース・デル・・・」

杖を力なく振りながら錬金のスペルを唱える。

鉄分を含むのか。鉄分だけ、取り出してやろう

『凝縮』の時のように、杖の先が軽く光った。

「錬金」

ぱちり、と軽い音がして、土の色が少し。ほんの少し明るくなった。鉄分が取り出されたのかどうかは分からない。

アリー又はその土くずをさわり、興味深そうに見ていた。

「若干、手触りが良くなっているような気がします。

坊ちやまは水、それと土が得意のようですね」

なれない魔法を使いへとへとになった自分を見ながらアリー又が言う。

水も土も、両親の系統と同じだ。

「若干、水のほうが得意そうですね。ブレイドの色も水色でしたし・・・わたしも水は多少使えますからご指導できるかと。

火が得意なほうが私としては教えやすかったですけど・・・」

メイジ、魔法使いは遺伝だ。両親の家系に、聞く限りでは火はいない。

自分の系統が火だったとすると、瞬間的に家庭崩壊が起きそうだ。

「・・・今日はもう休まないー・・・？」

精神力を使い切って、へとへとな自分が抗議する。
しかたないですね、とアリーヌがロッドを振った。

「では、昼食の支度をして参りますので、紅茶でも飲んでご休憩を」
ポットから湯気が出ていた。火と水のメイジは1秒で紅茶が出来る
から便利だ。

瞬間湯沸かし器も裸足で逃げ出すレベルに。
必然的にインスタントラーメンの多かった前世に、この使用人がい
ればどれだけ便利なのかと、
ありえない想像をしながら紅茶をすすった。

元帥

「ルノー、ルノー！」

ハリのある男性の声が広くも狭い屋敷中にこだまする。父親だ。まだ時刻は時計の針が真上を指したくらいで、帰ってくるのには随分早い。

「はい、こちらに」

カップを置き部屋から出て、手すりから玄関に向けて顔を出す。少し老けた父親がにっこりと笑った。

「ただいま、ルノー。エジエリーはどこだ？」

「自室で読書中かと」

「そうか。呼んできてくれんか？」

そういつて父は外套を玄関脇の上着掛けに引っ掛けた。

呼びにいこうかとドアを後手に閉めたとき、2階奥の部屋から母親が顔を出す。

ハリのある大声はしっかりと母の部屋まで聞こえていたようだ。

「あなた、どうしたんです？」

「おお、エジエリー。今日はグラモン元帥の四男の誕生パーティーなんだよ。」

「完全に忘れていた」

まあ大変、と母親が1階に降り、アリーヌを呼んだ。

ぱたぱたと音を立てて何事かとアリーヌが厨房から出てきて、少し驚いたように父親を見た。

「お帰りなさいませ、旦那様。今日は随分とお早いようですが」
「グラモン元帥の四男の誕生パーティーなのだ。すまんが、料理の手を休めて、礼服やらの準備をしてくれんか」

かしこまりました、と一礼してアリーヌが1階の部屋に消えていった。

「ルノー。今日はルノーもパーティーに出席してもらおうと思っている。」

日ごろの勉強の成果をグラモン元帥に見せるのだ。いいな？」

「はい、もちろんです」

グラモン元帥。知らぬ人はいないくらいの大貴族。

緊張で心臓がどくと跳ねるのを感じながら、一言返事で了承した。

でかい。

第一印象はそれだった。
馬車に揺られて1時間ほど。

趣のある外壁の向こうに聳え立つ、美しい造りの施された屋敷は、まさに『土の名門』と言うだけあった。

すでに何人もの貴族が集っており、派手なドレスを着た婦人、高そうな燕尾服に身を包んだ

貴族達が庭先で談笑しているのが見えた。

何人もの使用人が忙しく右へ左へ行ったり来たりしている。

派手な明かりに照らされた使用人たちは、若く美しい娘ばかりだった。

「ルノー、グラモン元帥とギーシュ様に挨拶をしなきゃいかん。無礼の内容にな」

「はい」

母親と手を繋ぎながら広い庭を進んでいく。

庭の端で燕尾服を着た男性達が弦楽器を弾いており、優雅なBGMが鼓膜に優しく通る。

父親は何度か貴族に声をかけられており、その受け答えが殆ど下手だった。

なるほど。貧乏貴族だということは間違いないらしい。

「グラモン元帥、息子のルノーです」

父が一礼して、一步下がる。

それを見て母親の手を離し、一步前へ進んで一礼した。

「はじめまして。父がいつもお世話になっております。息子のルノー・ド・ヴォージュです。

このような場におよびいただき、真にありがとうございます。

ド・ヴォージュが平穏な日々を送れているのもグラモン伯爵のお

陰。改めて感謝の意を」

「これはこれは、丁寧な挨拶だな。オーギュストの教育は正しいと見える。」

はじめまして、ルノー。 私がド・グラモン伯爵だ」

続けて、グラモン伯爵がギーシュ、と呼ぶ。

パーティーの席で、同年代くらいの巻き毛の女の子と話していたギーシュが少し面倒くさそうに
こちらに歩いてきた。

「ギーシュ。こちらがド・ヴォージュ少佐だ。去年も会ったな。

それから、こちらがその息子のルノー。こっちは初めてだな。

お前と同じ年だ。ほら、挨拶しなさい」

「はじめまして。ギーシュ・ド・グラモンだ。君の父方の活躍は耳に挟んでいるよ。

・・・ところで、君はもう系統魔法が使えるのかい？」

「いえ、まだコモンマジック止まりで・・・」

一応、今日使えたのだが、そう答えておく。使えないのも事実といえは事実なのだ。

「そうか！僕は土系統が得意だね！君が土系統なら指導してやってもいいぞ」

得意げにギーシュが言った。

苦笑いと愛想笑いの半分くらいの表情で返すが、行間が読める性格でもないらしい。

鼻高々に、「モンモランシーを待たせているから」と言っただけで元の席に戻ってしまった。

「魔法の才があるご子息様で、羨ましい限りですよ」
「何、利発そうな息子じゃないか。そのうち、君も追い抜かれるかもしれないぬ」

はっはっは、と笑う元帥に、父も笑った。

才能がないとはつきり言われた自分は、愛想笑いしながらそれにあわせて笑った。

これが、自分とギーシュの初めての出会いだった。

七年

7年たった。魔法の实力は5歳当時とほぼ変わらず。

凝縮を唱えれば、雫が落ち、錬金を唱えれば、土クズが上質な土クズに変わるだけ。

コモンマジックすら気を抜けば不発に終わる。失笑モノだった。落ちこぼれだった。

両親は気にしないと言っていたが、内心はそうでもないようだ。申し訳なくなる。

それに比べ、ギーシュは本当に少しずつではあるが、魔法の实力がつき始めているようだった。

趣味の彫刻も相まって、『ワルキューレ』と呼ばれる女性型のゴーレムを作ることには熱中しているようだった。

度々ギーシュとはたまに顔をあわせる機会がある。もちろん、こちらのほうが圧倒的に身分が下。

会うたびにギーシュのキザったらしい態度に磨きがかかっているようだった。

こういう手合いは苦手だ。

第一印象そのままの印象を今も持ち続けている。

精神年齢はすでに40に差し掛かり。

自分がガキのころだったら間違いなく喧嘩になっているんだろうな、と苦笑いする。

自分の体格は父親に似、がっしりとしたものになっていた。

もちろん、12歳にしては、だ。まだまだ父親のような体格には劣る。

アリー又は武術の覚えがないらしく、武術は父親に教わっている。
『お前は魔法の才こそないが、勉強、武術共にかんりの才能がある』
父親は口癖のようにそういった。魔法の才が息子にない事を悔やむように。

勉強に関しても、武術に関しても、人生二週目のため、出来て当たり前といえは当たり前なのだが。
主に、自分の得意とする喧嘩殺法が、父親には『才能』に見えるらしい。

勝利に向かい、意外な手を使う自分が面白くて仕方がないそうだ。

ド・ヴォージュ領は、グラモン伯から委託されたものだが、単に厄介領地を押し付けたという側面もあるようだ。

ド・ヴォージュ邸付近の中央街はともかくとして、少し町を外れると野盗、山賊がごろごろといる。
古い遺跡や洞窟が多く、
それをを寝床としてどこからともなく黒光りする害虫のように湧いて出るのだ。

魔法が使えれば、父と、警備隊と共に野盗狩りと洒落込めるのだろ
うけど、生憎魔法は殆ど使えない
それでも一応、武門のグラモン領の貴族。武の覚えは無くてはいけない。
そこでだ。

殆ど、いや全くといっていいほど被害報告の無い片田舎で肩慣らしをして、実戦経験を積むという
修行方法が取られた。

「ルノー。ここから先は、野盗の報告は全くないが、殆ど手付かず

の遺跡群だ。

亜人や怪物の類が出ないと言い切れん。マズいと思ったら、すぐに逃げるようにな」

「了解です、父様」

実際は何も出ないだろう。

亜人やモンスターの報告が無いと言う事は、少数ながら人の住むこの辺りの人間が皆殺しにされていない事実を含め、報告する必要がある、つまり、出ないということだ。

実戦訓練の一環としては丁度いいと思う。

「では父様。行って参ります」

「うむ。武運を」

武運を、と返して馬から下りる。

遺跡の多いこの辺りは殆ど道の整備がされておらず、

馬で通ることはよほどの熟練者でない限り無理な話だった。

農夫

父と離れて1時間ほど。

森林と小高い山に囲まれた村に行き当たる。

地図通りだ。こう見えて、前世から方向感覚に自信がある。

小道から村に入ると、怪訝そうにくたびれた服を着た農夫がこちらを見ていた。

「こんにちは。この村の人？」

「そうですけど……。どちらの貴族様で？」

身なりとロッドで貴族だと分かったらしい。

少し腰を引きながら、農夫が伸びた髭を指でいじりながら答えた。

「ド・ヴォージュ。この領地の委託領主だよ」

「おお、ルノー様でしたか！……こちらに何のご用で？」

農夫がたどどしく礼をしてから、また怪訝そうに問い返した。

たしかに、領主の息子がこんな平和そうな村に一人でぶらぶらしているのは不思議だろう。

「実戦訓練を兼ねて、見回り。野盗とか、モンスターとかの被害って無い？」

農夫がほっほっ、とおかしそうに笑う。

「では、訓練になりませんな。オーギュスト様のお陰で、見ての通り平和、平和」

だろうな、と思いながら、ここで帰れば父とアリーヌになんと言われるか分かったものではないと、
何か手土産になりそうなものは無いかとたずねてみた。

「手土産。・・・手土産ですか・・・？」

うーむ、と農夫が首をかしげる。よく日に焼けた健康そうな首元だ。

「・・・ああ！手土産というか、珍しいモンならありますよ、ルノーさま」

ひらめいた、と言わんばかりに農夫が手を叩く。

「へえ。どんな？」

「ここあたりにや、いや、ここっていうか、ヴォージュにや、遺跡が多いですけど、

あんなんは見たことないね」

もったいぶって農夫が言う。子供のように目が輝いていた。
案外、歴史や遺産が好きな教養ある人間なのかもしれない。

「誰にも読めん碑文が書いてある遺跡があるんですよ。20年程前、
わっしが22の時だったかな。

学者様が見に来たんだが、とんと、分かりもせずに帰っていきお
った」

「へえ。暗号か、古語か」

「学者様はこんな古語は見たことないと騒いでおりましたけどね。
しかも、強固な固定化の呪文のせいで破壊も出来ず、リードラン
ゲージも通用しないと。

噂によると、碑文を解読できると伝説のマジックアイテムが手に

入るとか」

あやかりたいね、と付け加えて農夫がまた大笑いした。

「ふーん。・・・一応見に行ってみるよ。どの辺り？」

「この村の西ですわ。歩いて30分もかからんじゃないかな。なに、あのあたりは鹿狩り

連中が良く使つとるもんで、獣道が出来てるはずですから、迷いたくても迷えんですよ」

びつと農夫が指差した先には鬱蒼と茂る草の中に、獣道らしいものが見えた。

どうやら、あの小道を30分歩き続ければいいらしい。

「ありがと。ちょっと行ってみるよ」

農夫に銅貨を3枚ほど私、小さく手を振った。

ありがたや、と言いなから農夫も手を振り返えした。

遺跡

「これかなあ・・・」

これだよなあ、と心の中で反芻する。

もう少し大きな遺跡、ゲームの中のダンジョンみたいなものを想像したのだが、全くをもって

見当違い。

6 m × 10 m 程の長方形をした石の塊。

入り口らしい門は砕けて、その遺骸がそこらに散らばっている。

破壊されたというよりは、自然に侵食されたイメージだ。

遺跡自体もかなり自然に飲み込まれていて、神秘的といえば神秘的なのだが、どうもただの

不気味な石の箱にしか見えない。

扉の残骸を踏みながら、入り口を潜る。

高さは2 m 程といったところで、閉所が苦手な自分は、頭のとっぺんがざわざわする。

窓すらない真っ暗な中、杖を振るって『ライト』を唱えた。

ぱつと明るくなった遺跡内は、本当に石の箱と形容するが正しい状態だった。

台座らしいものも、飾りも、宝箱も、モンスターも何も無い。

壁があり、床があり、奥のほうに扉らしきものが見える。ただ、それだけ。

白みの帯びた床と壁は、作った当時は綺麗だったのだろうけど、植物の侵食と

ひび割れでひどく汚く見える。

こつこつと歩くたびに音を反響させる石の箱は汚さも相まって不気味だった。

「ハズレだなあ、こりゃ」

呟いた。

ついつい一人のときは前世の口調が出る。

誰にも聞かれてないので問題ないが、貴族がこんな平民みたいな口を聞いたとなれば、

アリーヌがカンカンに怒ってくるだろう。

考え事をしながら進んでいると、直ぐ奥の扉らしきものまで来てしまった。

扉は強固に『固定化』のスペルがかけられているらしい。

周りの遺跡とは違い、鍊金が何かで新しく作られたのだろう。綺麗な白色をしていた。

「このあたりも壁も、固定化かけられてんな」

土の系統魔法も使えるからといって、自分はドットメイジ。

使えるといっても、鍊金で、お粗末な土くずをちよつと見れる土くずに変えるくらいなもんだ。

ましてや高等魔法の『固定化』を解除するなんて真似は地球がひっくり返ろつが無理な話だった。

「碑文つっのをさつさと読んで、テキトーにちっこい獣でも狩って帰るとするかあ」

> i 3 5 1 4 4 — 4 4 1 1 <

ライトのスペルで明るくなった杖先を壁に当てる。真っ白い壁に、何か掘り込まれているようだった。

「何々……。つて、……。え？」

時が止まった。

遺跡の静さも相まって、鼓動が大きく聞こえる。

杖をつい落としそうなくらい、自分は動揺している。

石の箱の向こうで鳥が鳴いている。どこか、別の国の話みたいに鳴き声が聞こえた。

ざりつと石を踏む音が足元からする。知らず知らずの間に自分は一歩下がったようだ。

見間違いかもしれないと、目をぱちぱちとさせる。

見間違いじゃない。夢でもない。いや、夢から覚めた気分だ。

嫌な汗が脇を伝っていく気持ち悪い感触がやけにリアルだった。

渴いた口を潤そうと、唾を飲み込むが、砂漠に水を1滴たらしただけ、全く効果がなかった。

「『ひ、ひらけ、ごま？』」

碑文を読み上げる。

白い美しい石壁に大きく刻まれていたのは、冗談みたいな言葉。

こちらの言葉じゃない。ルーン文字でもない。

『日本語』で『開け、ゴマ！』と書かれていたのだ。

石棺

突然、地鳴りのような音がして、目の前の扉が地面にめり込んでいく。

心臓が止まりそうなくらい驚いて、飛び上がった。

そんなものお構い無しにどんどん扉がめり込む。

胸を突き破って出てきそうな心臓を左手で押さえながら、杖の先を扉の向こうに向けた。

碑文の内容は日本語読みで『開け、ゴマ！』であっていたらしい。冗談のような話だが、学者の解けなかった碑文を1秒で読み解いてしまったらしいのだ。

「な、なんだよ、こりゃ、一体・・・」

夢だったんじゃないかと思えるくらいの昔の言葉。

12年前、自分が死ぬまで当たり前に使っていた日本語が、碑文？どうして日本語なんだ？

どうして開いた。この先に何がある。日本に帰れるというのか？伝説のマジックアイテムって一体なんだよ。日本語を使えるメイジがいるっていいのか。

疑問が脳の皺を刺激する。

暑くも無いのに、シャツがしっとりしている。

ざり、ざり、と泥棒が気配を殺して歩くように、ゆっくりと扉に向かって歩き出した。

碑文を呟いてから、2、3分で扉の向こうの小部屋に到達した。

体感的には数時間過ぎたような気分だが。

小部屋の奥には美しい全身鏡。全身鏡に映った自分は、酷い顔をしていた。

それから、全身鏡より少し手前側。
壁に密着して石の棺があった。棺には宗教的な装飾は一切施されていない。

前世で自分が見た吸血鬼映画の吸血鬼の寝床のようだと思い、身震いする。

『マズいと思ったら、すぐに逃げるようにな』

父のセリフが脳内で反響する。父のセリフのはずなのに、反響した声は、

どこか前世の自分の声に似ていた。

そうだ。これはマズいってやつだろう。さっさと逃げなければ。

思考の撤退命令を無視して、操られるように脚はゆつくりと、確実に石の棺に近づいていく。

もう棺は足元だ。

腰をゆっくり折る。延ばした杖を持っていない左手が棺を撫でた。

ひんやりとした無骨な触感が脳を痺れさせる。これは現実だ、と前世の自分の声が脳内で叫んでいた。

撫でていた左手と、杖を持った右手が棺の蓋に指をかける。

意外と重い。腰に力を入れて、『いや、待てまズいぞ！』という警告を無視して、蓋をゆつくりと開いた。

「うおおっ！」

叫んで、一步退く。棺の中には財宝が入っているわけでも、ヴァンパイアが眠っているわけでもなかった。

ただ、棺だから当然だろうと言わんばかりに白骨化した人間の死体が入っていた。

前世の仕事上、死体は見慣れていたが、白骨化したものは初めて見

た。人間の骨は思ったより白いらしい。
もう少し、黄ばんでいてもよさそうなものだが。

「死体が入ってるのはとーぜんか。・・・よし。別にヤバくはない
みたいだな」

一瞬、ホラー映画のようにガイコツが動き出したところを想像したが、棺の住人はうんともすんとも言わない。

バカらしい想像を振り切り、再び棺を覗き込む。

中身は手を組み、永遠の眠りについたガイコツ。・・・と、本。それから小さなジュエリーボックス。

店で売っているような本ではなく、個人が作ったような粗末な造りの本だった。

ただ、固定化がかけられているらしく、綺麗に残っている。

これにももれなく日本語が書かれており『初めに見てください』と説明書のようなタイトルがついていた。

「これが説明書だとしたら、この仏さんは商品かあ？」

頭骨をつんつんとつつぎながら、杖を持った手のほうで『初めに見てください』を手取る。

あまりいい紙を使っていないらしく、軽い。

「しつかり日本語だなあ。・・・どーなってんだこれ」

表紙を捲る。

ずらっと、懐かしい言語が並んでいた。

手紙

『暗号の解説、おめでとうございます。』

まずは、この本と共に眠る方のお話をさせていただきたいと思います。

彼の名前はヴィクトル。姓は知らないし、彼自身も言うことはありませんでした。

彼は、ゲルマニアの出だと言っていました。それすら不確かなことです。

彼は、一流のメイジでした。彼は厭世家でした。彼は全ての系統を唱えることが出来ました。

彼は、貴族ではないと言っていました。しかし、彼の纏う雰囲気は貴族のように上品でした。

彼は、マジックアイテムを作ることに、世界一でした』

1ページ目。汚い字でそう書かれていた。

なんだこりゃ。自慢話じゃないか。

期待を裏切られたような気持ちでページを開く。

『彼は、独身でした。けれど、彼のこの魔法を後世に伝えたいと思っていました。』

しかし、かれは厭世的であり、彼はひねくれ者でした。

そこで、私に問いかけました。『君の世界の言語を暗号として使いたい』と』

君の世界？・・・やっぱ、この世界は異世界だったのか。

ページを捲る。鼓動が早くなり、早く続きが知りたいと脳が告げる。

『次に、私のことを書き留めたいと思います。私のことは、殆どこの本に関係しません。』

私はこの世界の人間ではありません。月が一つしかない世界から来ました。

信じられないと人は笑いますが、これを読むあなたは、信じてくれるでしょう。

私の名前は、……あえて書きません。どうでもいいことでしょうから。

とにかく、私は別の世界で、別の仕事をしていました。そんなある日です。

私は旅行に行っていました。私の世界の私の国ではなく、私の世界の別の国へ、です。

そのとき、私はジャングルで遭難したのです。そのときでした。知らぬ間に、この一流のメイジの元へ来ていたのです。』

『信じられないでしょうか。私も信じられません。彼も、きっと、全て信じたわけじゃないでしょう。』

なにせ、ひねくれ者ですから。とにかく。

私は何故か厭世家の彼と気が合いました。彼は私が元の世界に戻るため、魔法の研究をしてやろうと

いいました。……結果的に、彼は天寿を全うし、私は帰る事は出来ませんでした。

彼はマジックアイテムの製作に関しては世界一です。いや、魔法の腕も世界トップランクでしょうが。』

『彼は私の世界の『フラッシュメモリー』という概念を気に入っていました。』

自分の魔法が後世に残せるかもしれないと。

私には難しいことは分かりませんが、十数年の月日を重ねて彼は

ある指輪を作り出します。

もし、あなたに。この文章を読んでいるあなた、若しくはあなたに近い人に。

魔法を使える者がいませんか。いたとしたら、彼の夢が適う事になります。

彼の遺体の脇にあるジュエリーボックスがあるでしょう。その中の指輪をつけて欲しい。

彼の魔法が、全てあなたに伝わるはずですから。指輪の性質上、実験が出来ないので、保障は出来ませんが。』

『最後に。

彼の使い魔を呼ぶ術をこのページの後ろに書いています。彼の使い魔は死を知りません。

彼の使い魔にもっと詳しいことを聞いてください。私はただのしがない平民ですから。

使い魔はジュエリーボックスを開く術を知っています。彼の言葉を知っています。

私の作ったこの文を読んでくださって、本当にありがとうございます。

彼からの選別です。後ろのページから読めば、秘薬の材料と調合法がある、と。

彼が直々に書いたものです。私のような駄文とは違うでしょう。

では。ご武運を。あなたが読ん

でくれて、本当に良かった。』

召喚

最後にこれを書いたであろう日付があった。およそ80年ほど前だ。だとすると、フラッシュメモリーはまだ無いんじゃないだろうか。いや、異世界の話だ。時系列が狂っていてもなんら不思議は無い。

何か不思議な気持ちを胸に抱いて、ページを捲る。

次のページも日本語で書かれていた。

『我が名は『あなたの名前』。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、使い魔を召還せよ』

この『あなたの名前』は赤木圭一なのだろうか。いや、違うか。ルノー・ド・ヴォーージュだろう。

このコモンマジックの呪文、確かアリーヌから聞いたことがあるような気がする。

ただ使い魔召喚とは、そのメイジの系統や実力左右されるという。はたしてこの筆者の言う『彼』の使い魔が召喚されるのだろうか。

ごくり、と固唾を呑む。

どうやら、自分の中に『呪文を唱えない』という選択肢はない様だった。

本を読むために座り込んでいたのだが、腰を挙げ、尻を軽く払い、杖を構えてライトの呪文を切った。

呪文は1度に2つ使うことは出来ない。

ドットの中の低級な自分でもこの呪文を唱えることが出来るのだろうか。

「我が名はルノー・ド・ヴォージュ。五つの力を司るペンタゴン。我が運命に従いし、使い魔を召喚せよ」

噛むことなく言い切ったと思うと、目の前に楕円の光の窓が現れた。そこから、不気味な顔がにゅっと現れる。

思わず悲鳴を上げそうになる。自分の想像する幽霊の概念にそっくりだったからだ。

ドクロの上に皮をはっただけのような痩せすぎた顔。

ぼろぼろのローブから、枝のような腕が少し出て、その先に枝分かれしたような鋭くて細い指。

腕も指も皺が入っており、色は真っ青。血が通っていないようだ。

そのボロボロのローブも腰辺りまでで終わっており、その先はない。幽霊といえば足がないのだが、この老人は下半身がないのだ。

老人の目はくぼんでおり、その先は真っ黒。

白いあごひげがだらしなく伸びており、中国の仙人のような印象を受けた。

そのあごひげと同じ色の頭髪は縮れていて、長毛の犬の体毛のようだ。

縮れた白髪の上には薄汚れた王冠。

ぼろぼろの黒いローブと相まって、この廃墟と白骨死体にぴったりだと思った。

「はじめまして、我が主よ。・・・随分若いようじゃのう」

長い髭を、枝のような細い指で撫でながら小首をかしげる。

「は、はじめまして・・・」

「その年じゃと、コントラクト・サーヴァントの方法は知らんのか？」

「・・・や、召喚できたんじゃないから知つとるのか？」

なにやらぶつぶつと呟いている。

しゃがれた声は外見から安易に想像できる声だった。

「主よ。コントラクト・サーヴァントは知つとるのかの?」

「あ、えつと、知識だけなら」

「よろしい。では、さっさと始めんか」

妙に上から目線で言われ、少しムっとしながらスペルを唱え始めた。

「我が名はルノー・ド・ヴォージュ。五つの力を司るペンタゴン。
この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

呪文を言い終わり、最後に口付けをしようと顔を寄せる。

『枯れた』という表現の正しい唇は、不健康な色をしていた。
ふと、顔を近づけている最中、この老人と目が合った。

老人は恥ずかしそうに、真っ黒な目を閉じる。

・・・何だか無性に腹が立つ。

軽く触れる程度に口付けをし、老人の手にルーンが光と共に刻まれる。

少し顔をしかめた後、老人は閉じていた目を開いた。

「人間に唇を奪われるのは久方ぶりじゃ」

「・・・うるせえ。俺だって好きでしたわけじゃねーよ」

何とかさっきの光景を思い出さずにしようと勤めた。

口調が前世のものに戻るが、戻せそうに無かった。

動揺するくらいに汚い光景だったのだ。

「なんじゃ。照れとるのか」

「違うわ！何が哀しくてテメーみたいなんでファーストキスを済ませにやなんのだ！」

「ほっほっほ。減るもんでもなし、そうカツカしなさんな」

「ファーストキスは減るんだよ！残機が1しかねえんだよ！」

じゃあ今の残機はゼロか。と首をかしげる老人。

自分は一気にまくし立てたお陰で自分は若干息が切れている。

「まあ、余談はおいとくか」

「おいとけ」

「随分口の悪い貴族じゃのう。老人を労わらんか」

また余談に入りそうなことを老人が言う。

何とか反論したい心を押さえつけて、老人の真っ黒な目を見た。

「口が悪いのは地が出てるからだ。・・・それよか聞きたい事が腐るほどあるんだけどよ」

「おーおー。そうじゃろ。ドンと来なさい。若者は老人の話に耳を傾けるべきで、

老人は若者に教えを請われた時、何でも答えるべきじゃな」

意味の分からん持論を持ち出して、うんうんと頷いてみせる。
見た目は怪物そのものだが、随分とひょうきんな性格らしい。

「あー、とりあえず、・・・アンタは何モンなんだよ」

「おお、自己紹介がまだだったかな、ルノー君」

契約のときに名乗ったため、しっかりと老人に名前を覚えられてい

るようだ。

「ワシはデッドウッド。ウッドでいいぞよ。種族はリッチじゃ」
「リ、リッチ？」

頭に浮かぶのはローブを着たしやれこうべ。つまり、死神。
確かに言われてみればこんな感じかもしれない。

「リッチを知らんのか？死者の精霊じゃぞ。・・・かつこよかろう
？」

「そうでもねえよ。デッドウッド。直訳で枯れ木じゃねえか」

ほっほっほ、と楽しそうにウッドが笑いこけた。

「そうじゃ。ワシは枯れ木。他に聞きたいことはないか、主よ」
「腐るほどあるつってんだろ。えーっと、そうだな」

いざ、質問を考えると順序だてて聞くことが出来ない。
頭の悪い人間の典型例だった。

「なんじゃ。ホントに腐ってしまっ出てこんのか。
なら、ワシから、前の主に頼まれた話でもするか」

言いながらウッドがゆっくりと浮遊して、白骨死体の上に立った。
立つという表現は誤りかもしれない。浮いているので。

「この骨こそが、我が元主。ま、こりゃ分かるわな。本に書いてあ
つたろ？」

ああ、と頷く。

ウッドが死体の上に浮遊していると、その死体の霊みたいだ。

「うむうむ。元主が変わり者じゃったことも知っておるな。

とりあえず主よ。元主の指輪をつけてほしいんじゃが」

「ああ、コイツの魔法を後世に残すための指輪だっけかあ？」

「そーじゃ。元主が死ぬことによって完成する指輪じゃから、実験はしとらんかの」

「それって、具体的にどんな効果があんだよ？」

ウッドがもったいぶるようにほっほっほ、と笑った。

さっき見た農夫と笑い方と話し運びが似てるな、とふと思う。

まあ、老人の――農夫は中年だったが――楽しみはこういったとうしよ
うもないことなのだろう。

「元主の魔法を完璧に主が使えるようになるんじゃ。魔力量も、元主と同じものとなる。

どうじゃ。見た感じ、魔法に関しては落ちこぼれのようなだから嬉しいじゃろ」

反応するのも忘れて大口を開いてしまった。

思わぬ活路だった。本によれば彼は『世界トップクラス』らしい。
なら。それなら。

ド・ヴォージュを『委託』領ではなく、『自国』領にするための力
になるかもしれない。

かもしれないじゃない。確実にその力は自分が抱いた儚い夢をかな
える力になる。

「ほっほっほ。アホ面しよってからに。ほれ。主が顎をはずしてい
る間に、この

ジュエリーボックスが開いてしまったぞよ？」

「は、外してねえよ。それよりホントかそれ」
「老人は若者に教えを請われた時、何でも答えるべきとさっき言ったばかりじゃろうが」

驚いている間にウッドが唱えたスペルがジュエリーボックスを開く鍵となったらしい。

枯れ木のような青白く尖った人差し指に金色の指輪が引っかかっている。

特に何の装飾もない鈍い金色の輪っかを見て、そんなに強力なマジックアイテムなのだろうか

首を傾げそうだが、ウッドは嘘をついている様子もない。

「ほれ。左の人差し指をだしんさい」

無言で左の人差し指を差し出す。

ウッドを指差しているようにも、とあるSF映画のワンシーンにも見えた。

その指へウッドが器用に指輪を引っ掛ける。随分とオーバーサイズだった。

「これ、アクセサリーにして首から提げた方がよくないか」
「まあ見ておんなさいって」

突然、鈍く光っていた金色の指輪が明るく光った。
暗闇に慣れた瞳孔に光が乱暴に体当たりをしてくる。
思わず目を閉じて、一歩下がる。

「うわっ！」

「ほっほっほ。もう大丈夫じゃよ。目を開けんさい」

恐る恐る目を開く。

カメラのフラッシュを浴びた後のような赤紫の光が右へ左へ動き、視界の邪魔をした。

見やすいように左腕を折り曲げて、人差し指を目の前に持ってくる。金色の指輪は、そこにあって当然かのごとく、ぴったりのサイズで自分の人差し指にはまっていた。

「自動サイズ調整。素晴らしいじゃろ」

「す、すばらしい・・・かな」

右手で軽く取ってやろうかと引つ張っても、まったくびくともしない。

前世ではまり込んだゲームの『呪いのアイテム』を髣髴とさせた。

「取れないのか」

「取れんの」

「・・・風呂はどうすりゃいいんだ」

「固定化の呪文でこの指輪は錆びん」

「俺、成長期だぞ」

「一緒に大きくなるぞ」

「・・・どうやら、この指輪とは一心同体のようだった。仮に指が千切れたらどうなるのかは怖いので聞かない。」

「どうじゃ。体に変化はあるかの？」

「・・・や、特にねえなあ」

ウッドが首をかしげた。

「ちよいと試しに軽くフレームボールでも出して見てくれ」

フレイムボール。火のラインである、使用人のアリーヌがたまに見せてくれたスペル。

若干の追尾機能と、身を焦がすほどの熱量。

あれが使えるというのか。ごくりと固唾を飲み、呪文を唱えた。

「フレイムボールっ！」

入り口の方へ杖を向けて叫ぶ。

叫び声が石の箱の中を何度も反響し、空しく消えていった。

「おろ？」

不思議そうにウッドが首をかしげた。

髭を撫でる手が若干早い。すこし焦りが生じているようだった。

「おろ？じゃねーよ！これじゃただの取れない指輪じゃねーか！」

「待て待て待て。ストームを唱えてくれ」

さつきと同じように唱える。

竜巻が発生することは無く、見事に声だけが石の壁の中に消えた。

「しつぱいじゃったかー……。いや、残念じゃのう」

「残念じゃのう、じゃねーよ！ボケてんのかジジイ！」

ウッドが肩をすくめてやれやれと、この世界ではないであろう米国人のような反応をする。

軽く首を振ってから、ウッドが続けた。

「まー、しゃーないって。元主も失敗はあった。つーか失敗だらけ

じゃった。

人間は失敗して大きくなるもの。失敗を責めてはいかん」

「大きくなんねーよ！このまま風化して小さくなる一方だろうが！」

いい話みたいにして、纏めようとするウツド。

一生取れない薄汚れた指輪と付き合わなければいけないらしい。

しかも、不死の老人と共に。軽く悪夢だった。軽くじゃなくて重く悪夢だった。

「そう怒りなさんなつて、主よ。精霊を召喚できただけでも良しとせんか」

「・・・なんで事情を知ってるアンタが都合よく召喚されたんだ？」

「この石室は特殊なルーンで加工されておつての。ここでサモン・サーヴァントをすると、

ワシが召喚されるようになっておる」

事情を知らずにここでサモン・サーヴァントをしたメイジがいたら腰を抜かしそうな事実だった。

「・・・で、精霊の爺さんよお。精霊っていうくらいだから、何ができるんだ。先住魔法か？」

「ああ・・・。先住魔法はできんぞよ。死者の精霊って、元人間ばっかじゃし」

ダメダメか、このクソジジイは。

仏教の心得があつたなら、今この場で大成仏させてやれたのに。真剣に前世で仏門に入っておけばと後悔する。

「待て待て。・・・なにか良からぬことを考えておるじゃろ。

ともかく、ワシにだって色々できるんじゃないぞ。まず一つ。ワシは死なん」

「俺にとっちゃ欠点だよ、それ」

「そう哀しいことを言っんでないぞ。それから二つ。ワシはトライアングルメイジじゃ」

首をかしげる。トライアングル？メイジ？

「魔法が全く使えんとも思ってたか。リッチになる前、ワシはフツ―に貴族じゃったぞ。」

大貴族じゃ。侯爵じゃ」

グラモン元帥の上の位だったらしい。この汚いナリからは想像もつかない。

「死なんといつとるのに、老人姿はおかしいと思ったじゃろ？こりゃ、死んだときの容姿なんじゃよ」

骨と皮だけになってようやく死んだのか、この老人は。

大往生だな。憎まれっ子世に憚るってやつだ。

「そうなのか。そうなる以前の名前なのか、デッドウッドって」

「や、違う違う。子に『枯れ木』なんてつける馬鹿親はそうおらんじやろって」

前世の自分の国だと探せばいそうな話だったが、頷いておく。

「生前の名は言えん決まりになっておる」

「言ったらどうなるんだよ？」

「成仏じゃ」

ウッドが天を指差した。枯れ枝みたいな指がアンテナのように見える。

しかし、いいことを聞いたかもしれない。これで、この召喚契約が無しになるのだ。

「なあ、アンタの本名を言わないと指輪が発動しないって書いてあったけど」

「・・・主よ。本気で成仏させるきじやな？」

すぐさま嘘を見抜き、発言したと同時に続けるようにウッドの枯れた口が動く。

滑っているかのようなめらかなスペル。それと同時に首元にひんやりしたものが当てられた。

「ジャベリン。・・・どーじゃ。魔法もロクに使えんひよっこより使えると思うがの」

「・・・おっしゃるとーりで」

降参、と言いたげに両手を挙げてやると氷の槍は音もなく崩れ去った。

「しかし、困ったのう。折角80年も待ったというのに」

「俺も困ったよ。はあ。両親になんて説明すりゃいいんだ」

ウッドが面白そうに笑った。全く人の事情を考えていない笑いだっ

た。腹が立つが、逆らえばジャベリンで串刺しなのだろうか。

主従関係の契約書を読み直したい事態だ。

「大丈夫じゃ、主よ。ワシは死者の精霊。闇に紛れ、影に溶ける」
「？」

「つまり、身を隠せるということじゃ」

最悪の事態は免れたらしい。軽くよっしゃとガッツポーズ。

「そーいや、アンタ、どうやって魔法を使ったんだ？見たところ杖もないようだが」

「ん？ワシくらい年季の入ったりリッチは、杖と体が同化するんじゃ。たぶん、この辺」

といって真っ暗闇になっているローブの中を指差す。
理屈の分からない話だった。

「ワシも聞きたいと思っと思った事があってのお」

長い髭を撫ぜる。聞きたいこと。何だろう。どこの領地の貴族か、とかだろうか。

「ツレはどこじゃ？」

「ツレ？」

「まさか、主一人でこの・・・なんじゃったっけか。『にっぽん』じゃっけか。」

あれを読むわけではあるまいに」

ああ。

そのことが。

どう説明すればいいんだろうか。生まれ変わってからでいいんだろうか。

どうして死んだのかも？前世の職業含め？

「何じゃ、難しい顔しおって」

「や、どこから話すべきか迷っててな」

「なに、全部話しゃいい話じゃろ。ホレ、聞いてやるからドンときなさい」

細い腕をボロボロのロープに叩きつける。

ぽふつと頼りない音が石の箱の中に小さく反響した。

反論して、適当にごまかそうとも思ったが、やめた。

今日から死ぬまで。文字通り死ぬまで。コイツはパートナーなのだ。こんなチャラけたジジイと共にだなんて信じたくはないが。

「あー、長くなるぞ」

「ドンときなさい」

いい機会かもしれない。

死んでから、12年。前世の思い出を清算するには。

前世

赤木圭一。自分の名前だ。前世で親から貰った初めての贈り物。記憶の最初は、母親と、知らない男性――恐らく父親だろう――の言い争う姿から始まる。

どんな言葉かは思い出せない。ただ、口汚く、互いの尊厳を傷つけあい、言い争っていた。

赤木圭一は劣等性だった。

小学校の頃からよく同級生を殴っては、母親が学校に呼ばれていた。寂しかったと言えば言い訳になるのだろう。ただ、自分勝手に生きた結果だったと思う。

初めのうちは母親も自分に注意したが、5回。10回。

殴る回数が増えるにつれ、母親は何も言わなくなった。友達も減っていった。

何もかも、上手くいくはず無いと、小学生のクソガキながらに思ったのを覚えている。

本格的に歯車が狂い始めたのは中学生のときだっただろうか。

別の小学校の自分のような立場、大人から不良と呼ばれていた連中と遊ぶようになった。

家に帰る回数は目に見えて減るようになり、代わりに吸うタバコの量と、万引きする物品の量が増えた。

母親はもう何も言わなかった。冷たい目で自分を見ていた。

もしかしたら、この自分の姿に自分の父親、つまり母親の夫を思い出していたのかもしれない。

ある日の事だった。母親は自分と口すら聞いてくれなくなった。

何がきっかけだったのか。決定的なものはなかったと思う。

挨拶すらされなくなった。ない物のような扱いだった。当たり前か

もしれない。

こんな出来の悪い息子を手放したものにしたいと思うことは普通の考えだ。

ただ、食事代として毎日、千円札が2枚机においてある。

それを財布にいれ、仲間と面白おかしく過ごす。そんな日々だった。当時は鮮明に色がついていたと思うが、思い出すと、全く色のついていない空しい日々だった。

劣等性だったが、特に理由もなく、高校へと進学した。

名前を書けば受かるようなぼろっつい私立高校だった。親は、進学先に関しても何も言わなかった。

中学生の時と何も変わらない日々だった。二千元。仲間。万引き。酒。タバコ。女。

高校生の肩書きを手に入れて半年くらいだっただろうか。まだ15のガキの頃だ。

仲間から、『いい仕事がある』と誘われた。狂いながらもいびつに動いていた歯車が、止まった瞬間だった。

タバコの販売。1箱1万円から。

もちろん、まともなのは外のパッケージだけ。中には小さな袋に入った乾燥した葉っぱ。

どうしてこうなってしまったんだろう。疑問の必要も無いか。重力に身を任せて落ちただけだ。

とにかく。自分は、知らない間にプッシャーになっていた。

罪の意識も無く。泥沼に嵌っていく絶望感も無く。

夢見る葉っぱを運ぶ、素敵なサントになってから3ヶ月。

年は16になっていたと思う。本業の『サント』が忙しくなっていた頃だ。

進学したのと全く同じ理由。『特に理由も無く』高校をやめた。

母親はやっぱり、そこに何もなかったような反応だった。少し憎ら

しげに見たかと思うと『そう』とだけ言った。

久しぶりに聞いた母親の声は疲れていた。この世で最も不幸な女だと言いたげだった。妙に腹が立った。

自分は直ぐに家を出た。『サンタ』の収入はとてつもない金額だった。

額面を大人に言えば、そうでもないだろう、と答えると思う。でも、高校生にしては、破格の金額だった。

ここから。

転落に加速度がついてきていたと思う。

気がつけば成人になっていた。成人式で会った同級生はみんなイキイキした顔をしていた。

ある者は大学生だと言った。ある者は夢を追って専門学校生だといった。全て、盗み聞きした話だが。

中学のときの『仲間』は殆ど家庭を持っていた。

もう悪いことはできない。子供のためにさ、と口を揃えていつていた。

自分と大差の無い中学校生活を送ったのに。どこで差がついたのか。何が間違っていたのか。

疑問だった。腹立たしかった。――悔しかった。

成人式から1年も立たない間に、プッシャーから運び屋に転職していた。

いや、転職『させられて』いた。

ああいう、使い捨ての駒を使う仕事より、もっと大きい仕事を任せたいと『サンタ』の大本から言われたのだ。

給料も倍になると、小太りの兄貴分がそう持ちかけてきたのだ。有無を言わせない笑顔で。

実際に。給料は倍になったかもしれないが、つかまるリスクは数倍

に膨れ上がっていた。

軽いものは不法投棄用の家電から。重いものは死体まで。

何でも運んだ。違法ブランド品だって。銃器だって。裏金だって。

青い服を着て鉄砲をもったお兄さん達を見ると、胃のあたりがムカムカするくらいに。

その仕事の片手間に詐欺や窃盗も繰り返していた。

倍の収入を超えるほど遊んでいたからだ。実入りも大きければ、出資の莫大な量だった。

狡すっからい犯罪に、自分は向いていたと思う。

だまされた女性や老人はみんな笑顔だった。

財布をスられた男性も、まったく知らぬ顔で恋人と手を繋いでいた。初めは心が痛んだと思う。でも、罪を繰り返していくたびに痛みは小さくなった。

痛み慣れていった。慣れるというよりかは『不感症』になっていた。

あぶく銭を手に入れ、女、酒、タバコに使う毎日。

楽しかったかもしれないし、楽しくなかったのかもしれない。思い出せない。

小太りの兄貴分が『死神』になったのはそれから8年後だった。

子供一人を育てるくらい金の、遊びに使っていた自分に、兄貴分がああ笑顔でやってきたのだ。

『敵対する、外国系の組織のクスリを奪って欲しい』といいながら現代の胡椒ともいえる夢見る小麦粉を、1t以上も仕入れ値無しで手に入れることが出来れば。

利益が山ほど出ることはどんなばかにだって分かることだ。

敵対組織への『見せしめ』にもなる。1つで二度おいしい。ほっぺが落ちそうだ。

ただ、それを実行する者が殆どいないのは、それ相応のリスクが必要だからだ。

文字通り命がけの作戦となる。

『大丈夫だよ。赤木。向こうは油断してか、サツを警戒してか、少人数でくるみたいなんだよ。』

俺の言うとおりに行動しろ。アガリは600万だ。悪くない話だろう。

外国に高飛びして、ほとぼりが冷めるまで女でも困って遊びまくれ。な？』

有無を言わさぬ笑顔と、未来に待っているだろう、栄光。

断る理由は無かった。初めて商品ではなく、武器として握った拳銃は妙に重かった。

実行の日は、よく『一つだけの』月の見える夜だった。

郊外の港。『製粉工場』と名ばかりの――粉を扱っているのは確かだが――海沿いの工場の倉庫で。

男が3人いた。みな東洋人だったが、どこか外国風の顔立ちをしていた。

同じように兄貴分に雇われた哀れな犠牲者が8人。真っ黒い拳銃を構えた。

ハリウッド映画のようなかつこよく燃える銃撃戦ではなかった。

全員の銃が雄たけびをあげ、1発10万円弱もする小さな鉛の塊が男3人を食いちぎった。一瞬だった。

初めて引いた引き金の感覚は、ファストフードで食べ物を頼むくらい手軽だった。命は軽かった。

担当通り、自分と、もう一人の仲間が男達の過去形をバンにつめる。仲間は手間取っていたが、自分は手馴れたもので直ぐにそれが終わる。

血の跡を消すためにまいていたおがくずを手早く袋に入れ、軽く水をまいたときに、外から悲鳴が聞こえた。

驚いた仲間が自分を置いてバンを走らせた。結果的に言うと、バンは海に突っ込み、

ただの鉄の箱になってしまったのだが。

4人の棺となった車を尻目に、怒声の飛び交う中、自分は海へ身を投げた。

陸路で逃げる選択肢はなかった。うじゃうじゃと人が湧いてきていたからだ。

あの様子だと、粉運搬係は今頃三途の川を泳いでいるだろう。

泳ぎには自信があつたほうなのだが、夜中で、しかも着衣だったということが仇となった。

シャツとズボンはもどしそうなくらい海水を飲み込み、鎧のように重たく自分にのしかかった。

それでも、生きるために。必死で泳いだ。真つ暗な海の水は悪魔の口の中のようなだった。

数万の本体と、10万弱の弾丸6発を抱えた拳銃は、悪魔の口に飲まれてしまった。

もちろん、そんなことを気にする余裕などどこにも無かつたが。

体感的には数十時間も泳いだ気持ちだったが、時間的には1時間も経っていない頃だろう。

体力も限界に達し、テトラポットが見えたため、それを掴んで陸に上がった。

夏ごろだったが、風がやけに冷たく感じられた。体が冷え切っていた。

温い味噌汁でも飲みたいと場違いな空想に浸っていたとき、近くで怒声がしたのだ。

方向が分からなかったせいで、ぐるぐると同じところを泳ぎ回っていたらしい。

製粉工場から500mほどのところで自分は姿を現したのだった。

あとは、冒頭の通り。

怖い外国人のお兄ちゃんたちに、鉄砲で撃たれておしまい。

襲撃

「それで、気がつけば生まれ変わってたわけ。俺の前住んでたトコが日本だったから日本語が読めたわけだ」

「主もワルよのう」

すぐさま茶化すようにウッドが言った。

重たい空気が直ぐに霧散する。狙ってやったのか。考え無しだったのか。

「しかし、主も若いのにそんな事情があるなんてのう」

「クズがミスっただけの話だ。それに、生まれ変わって感謝してんだよ？」

今んとこ、しっかり子供やれてるしさ」

ほっほっほ、とウッドが大笑い。

「ワシにあつた時点でしっかり子供ができぬ事態になるかものお？」
「勘弁してくれよ、ホントによお・・・」

ため息をついた。それと同時くらいだろうか。

外がやけに騒がしい。鳥の声ではない。複数の人間の声だ。

「騒がしいの？」

「ちよいと見てくるか」

どっこいせ、と立ち上がり、小部屋から出る。

外から差し込む光が眩しい。吸血鬼にでもなった気分だ。

「おい」

突如、差し込む光がさえぎられて男の声がした。

「お前、その暗号、解いちゃったのか？」

逆光で男の姿はシルエットになっている。父親までとは行かないが、体格のいい男だった。

「まあ、そんなところ・・・ですかね」

敬語にしようか迷った挙句、中途半端な言葉になった。
男は自分の言葉遣いを気にする様子も無く続けた。

「そーかい坊ちゃん。じゃあ、お兄さんに奥の部屋にあったものを渡してもらおうかな」

お兄さんって年でもないだろ。声の感じから。

「あはは、困ったな。何もありませんでしたよ。あ、ガイコツがあっただけで・・・」

「あつはつは！そんなわけないだろ、坊ちゃん！」

ぶうん、と風が切る音がして、シルエットが突然近くなる。

目の前に剣が突きつけられいた。目のも留まらぬ速さで、杖を構えることすら出来なかった。

達人。この辺りの野盗被害報告がなかったのは、相当したたかなヤツが住んでいたからだったのか。

「坊ちゃんは貴族だったよな？杖を下ろしな。そしたら坊ちゃんの

ウチから身代金たっぷり貰うだけで

我慢してやるからよ。それとも、戦うか？

五体満足でママのあったかい料理を食いたいんだったら、大人しく従うのがベストだと

お兄さんは思っぜ？」

シルエットの男性は笑い声を上げる。勝利を確信した、悪党の笑い方。

懐かしい、遠い過去によく聞いた笑い声だった。

「ジャベリン」

しゃがれた声が背後から響いた。

それと同時に、氷の槍がシルエットの男を貫く。

かひ、と空気の抜ける情けない音がして、男のシルエットが視界から消えた。

「ほっほっほ。大丈夫か、主よ」

「あ・・・あ、ああ」

呆然と言った様子で反応すると、ウッドは面白そうにまた笑った。

「主もまだ子供よな。血を見て気分でも悪くなったのかの？」

「違うわい。ちょっとびっくりしただけだ」

ふん、と鼻を鳴らして足元に転がった男の死体をつま先で小突く。汚い革の鎧に身を包んだ、よく肌の焼けた褐色色の男だった。

「これ、俺の手柄にしていいい？」

「明らかに主の使えるような魔法の傷跡でないが、それでよいのな

ら
」

悔しそうに唇を噛む自分を見て、ウッドがより面白そうに笑った。
意地が悪いというより、老人特有の遠慮の無さがその笑みの中に見える。

「とにかく、一旦出るか。仲間がいたら大変だ」

「それには同意よの。・・・主よ、これを」

あの本が手渡される。『初めに見てください』と書かれた表紙を見て、何だか不思議な気持ちになった。

山賊

「親方、中はどうなつてたんで？」

「ああ、親方。やっぱ、開いては無かつたんでしょう？」

「親方。本命の貴族のガキは？」

木々から優しくもれる光と一緒に浴びせられたのは、屈強な山賊たちの歓迎の言葉だった。

笑い声と一緒に思い思いに振り向いた山賊たちの表情が凍りつく。計8名。みな汚れた革の鎧に身を包み、手に手に剣を持っている。鎧とは裏腹に、剣は木漏れ日を強く跳ね返している。仕事道具は大事にするらしい。

「・・・おい。親方をどこにやつたんだよ」

長剣を手にした男が近寄りながら凄んでくる。

12歳のガキ相手にここまで本気の殺気を出すんだから恐ろしい。思わず一歩引く。

（おいウッド！）

契約した使い魔とは念話できると聞いたことがある。強く念じると、ウッドから反応が返ってきた。

（何じゃ）

（何でお前はそんな余裕なんだよ！）

（ワシ、もう一度死を経験しとるからのお）

（そりゃ、俺も一緒だクソジジイ。それよか、助けてくれよ）

（ほっほっほ）

場違いに大笑いする。ウザイ。さっさとしてくれ。

（主よ。そりゃ無理じゃ）

返答は『お安いご用じゃ』ではなかった。
失望感と苛立ちが脳を真っ赤に染めていった。

（テメ、こんなときにふざけんなよ！）

（ふざけてはおらぬ。エネルギーが足りんのじゃ。
ワシのエネルギーは主のエネルギー。主がワシの分まで食べなければ、

ワシは魔法を唱えるどころか、この世界に干渉できん）

驚きの事実だった。先に言えよ。本気でボケてきているのか。
いくら驚きの事実に打ちひしがれていても、山賊はそんなのお構い
無しだ。

長剣が首元に突きつけられる。

（主よ。最後をお願いじゃ。これが無理ならワシと同じ死者の仲間
入りじゃな。

何、案外楽しいもんで、夜は墓場で運動会じゃ）

（お前、俺の世界知ってるんじゃねーのか？！）

（ほっほっほ。それより、早くお願いを聞かんと、ホントにワシの
仲間になってしまいそうじゃのう。

今からリッチになるための試験対策でもするかの？）

（しねえよオ！勉強は嫌いだし、お前みたいにもなりたくねえ！
それよりお願いって何だ？早くしてくれ！）

（今からわしが言うスペルを唱えて、『水流』を想像するのじゃ。
主は水のメイジじゃったよの？）

さっきの話の流れで得意系統を言っていたのだ。
だが、使えるスペルといえばコンデンセイションくらいなもので。

（ホレ、言つぞ・・・）

「おい、ガキ。何か言ったらどうだ」

「ビビって何もいえねーんじゃねーっすか、副長」

「そうか。それもそうだな。じゃあガキ、俺は何も怒っちゃいねえ。
ただ、さっき入っていったオッサンがどこにいるか聞きたいんだ。
分かるな？」

親分のことオッサンって言ってやるなよ、とヤジが入り、山賊たちがそろって大笑いした。

副長と呼ばれた長剣の男も軽く笑った。

「ほれ、言ってみ・・・」

「ウォーターカッターっ！」

これで呪文が発動しなければ一巻の終わりだったが、杞憂だったようだ。

袖下に隠していた杖が揺れ、思わず体制を崩す。

物凄い勢いで杖から噴射された水流は、自分の服の袖を食い破り、その真正面に位置していた男の膝を切り裂いた。

「うがああああああつ！！」

男が先の消失した脚を抑えて転がった。

あふれ出た血は止まることを本当に知らないようで、深い緑色の草を真っ赤に塗りつぶしていく。

吹き飛んだ脚が目の前に転がってきた山賊の一人が、ひっと小さく悲鳴を上げて飛びのいた。

「こ、このまま大人しく下がれば、これ以上のことはしません。
この人のようになりたくなかったら、剣を置いてこの場を去ってください」

杖を構えてそう言う。杖の先に立っていた山賊が体をよじり、移動する。

本当は武器を下ろさせてお縄にするのがいいのだが、自分はそこまですでできる自信が無い。

この強力で聞いたことの無い呪文が、何回使えるか分からないし、実戦で動き回る彼らにあてる自身も無かった。

「てめ、・・・ガキだからって、油断したのが悪かったみてーだな・・・」

脚を抑えた副長がよろよろと這いながら山賊たちに合流していた。山賊の一人が副長の手を取り、樹の根元にもたれかからせてやっている。

「ふ、副長、どうしますか」

副長の手伝いをしていた山賊が戸惑った様子で聞く。
無精ひげの生えそろう、気の強そうな男だった。

「かまうこたねえぜ。全員でかかっていきや、問題ねえ。
あの威力だ。ドットクラスじゃ、一発で限界だろうよ」

それを聞いて山賊たちが武器を構えなおす。

まずかった。一発で限界に達したわけではないにしろ、魔法を使った後特有の倦怠感が体の芯で燻っている。

交渉の余地は無かった。素早くスペルを唱え、杖を振った。

「ウォーターカッターっ！」

極限まで圧縮された水の刃が、雷撃のように一直線に進む。

当たったのは副長の顔、真横。飛び散る水しぶきに彼の真つ黒な毛が混じっていた。

「次は、当てます。賢明な判断を」

嘘だ。当てるつもりだった。

彼の首を狙い、ド派手に血飛沫を上げれば他の連中も退くと思ったからだ。

ここから副長との距離は約3、4 m。この程度でも当たらないなんて。

「武器を捨てますか。それとも、武器自体を持てなくなりますか」

山賊の親方みたいな物言いだなあ、と楽天的に考えながら駄目押し。勝率は人数的には向こうだが、流れは圧倒的に自分にあった。

「・・・お前ら、武器、捨てろ」

副長が悔しそうに言った。

千切れた脚はいつの間にか布が巻かれてあったが、殆ど意味が無いらしい。

どんどん、彼の足元の赤色が占める割合が大きくなっていた。

とさ、とさ。

重い音が切れ切れに響く。一人、また一人と草の上に武器を置いた音だった。

勝利のゴングの音といっても過言ではない。ただ、爽快感は段違いだった。

「のう、主よ」

「なんだ、役立たずの枯れ木ジジイ」

「言つのう……。じゃなくて、何であやつらは主がドットクラスなのを知っていたのかの」

「ああ、領主の息子は無能だったのは有名な話だからな」

「そうか……。ではなぜ、すぐに主が貴族だと？」

「ああ……。あれかなあ。あつこいくまでに、農夫と話をしたんだが、繋がってたのかも」

「ほうほう。怖い世の中じゃのう」

「お前の見た目のほうが怖いぞ」

帰り道。

あと20分も歩けば馬を置いた場所に着く。

帰りの村である農夫はいなかった。やはり、そういうことなのだろうと思う。

なぜ水のスペルが使えたのか。

ウッドは理由は何となく分かるが、少し考えさせて欲しいと言った。元主が完璧な理論を組んだと思っていた分、思うところもあるのだろう。

「なあ、ウッド」

「なんじゃ」

「さっきは悪かったな。助かった。ありがとう」

「なに、主を守るのは使い魔として当然じゃろって」

帰宅

「急に魔法がお上手に……。何かあったんですか」

使用人、アリーヌが驚いた顔で言った。

ふわふわの毛が揺れて、真っ白で形のいい耳が見え隠れする。

「あー……。あれかな。この指輪つけてると、なんか気が引き締まるからかな」

左人差し指を見せる。古ぼけた金色の指輪が鈍く光を跳ね返していた。

「へえ。どうしたんです、これ？」

「昨日、遺跡で拾ったんだよ。綺麗だろ」

「……。まあ、骨董的な意味で綺麗ですね」

曖昧な返事をされる。わかるぞ。お世辞にもこの指輪は綺麗ではない。

「昨日といえば。山賊を追い払ったらしいですね」

「追い払った……。っていえばそうかな。ホントは捕まえなきゃいけないんだけどさ」

昨日のことだ。

日本語の碑文。枯れ木の老人。山賊。

2度目の人生で最も密度の濃い日だった。確実に。

少し、時間を戻そう。

あの後、自分の体についた血の飛沫を見て、父親は腰が抜けそうなくらい驚いていた。

怪我は無いか。モンスターに襲われたのか。警備隊を動かそうではないかと。

いや、それより治療が先か。グラモン伯に頼み、水のメイジをいや、俺が水のメイジだった。

いまから治療を開始しよう。どこが痛む。無理をするな――。

そこまで言いかけたところで口を挟んだ。親馬鹿だった。いや、馬鹿親だった。

「大丈夫です、父様。これは僕の血ではなく、卑しい山賊のもの」「何？山賊？」

「はい。このあたりをめぐらにして、態々遠くの地へ盗賊行為を行っていたのでしょうか。」

僕の実力では、捕まえることが出来ませんでした、何とか追いつて返すことが出来ました」

がっつと、意志の強そうな父親の瞳が開かれる。

ペリドットみたいな瞳が緩やかに湿度を増していく。

「・・・、なんと！追い払ったというのか、ルノー！」

「はい。なんとか、といったところですが」

言うや否や。

自分の体は父親の大きくてごつごつした体に受け止められていた。痛い。全身の骨が軋む。

「素晴らしい！よくやったぞ、ルノー！何か褒美をやらねばな！
よし、アリーヌに頼んで、ルノーの好物のマロンパイを焼いて貰
わねばなるまい！」

早速帰宅しようではないか！・・・おっと、その前に山賊の規模
や人数、人相を教えてくれんか。

警備隊にこのあたりを搜索させよう。・・・ルノー、協力して・

」

筋肉の圧力で圧迫された自分は、白目をむいて気絶していたらしい。
謝罪しながら肩をつかみ、ぶんぶん前後に振り回されて気がついた。

「すまん、ルノー、大丈夫か？！俺は感情が先に出るタイプだから
な。

気分は悪くないか？」

まだぶんぶん振られ続けている。これのせいで気分を悪くしそうだ。

「だ、だい、大丈夫、ですから・・・ふる、振るのをやめてくだ
さい・・・！」

「おお、おお・・・！すまん、すまん」

ぴたりと手が止まる。

ぐわんぐわんと視界が揺れて父親のごつごつした顔が二重にも三重
にも見えた。

「え、えーつと何でしたっけ」

胃を緩やかに漂い、圧迫する吐き気を抑えながら聞く。

感情の高ぶりは収まったようで、父親はうむ、と頷いてから続けた。

「山賊連中の容姿、人数、装備を教えてくださいんか」

「容姿は・・・すいません。みな同じような感じでしたので、詳しくは。」

全員日に焼けた逞しい男でした。

人数は8人です。装備は・・・、全員武器を捨てて逃げていったので、

次会う時にどういった装備なのかはわかりません。ただ、全員、剣を装備していました。

槍、鈍器といった少し特殊なものを持った山賊はいませんでした」

正確に言うと9人なのだが。

あの死体は、恐らく父の警備隊に発見されるだろう。何とかごまかしを考えておかないと。

「ふむ・・・。傭兵崩れかもしれんな・・・。そうだ。場所だ。どのあたりで遭遇した？」

「場所はここより先の村から西へ徒歩30分の辺りです。目印は小さな遺跡です。」

彼らが戻って、武器を拾わない限り、まだそこに武器が落ちているはずです」

戻ってくることはほぼ無いだろう。

頭が殺され、その腹心も片足を千切られたのだ。

「よし分かった。ルノーは先に行きなさい。俺は先に様子を見に行き、ついでに武具を回収する。」

家に帰る前にニコラに今の話をして、直ぐに警備隊を出させなさい」

いつもだと翌日になるのだろうが、息子に襲い掛かった山賊をどうにかしたいらしい。

ついでにニコラというのは警備隊の隊長だ。警備隊といっても、貧乏貴族の警備隊なわけで、

明らかにこの辺りに出る山賊の数とはつりあっていない。名誉隊長の父を含め１１人しかいない小規模な隊なのだ。

「分かりました。では、父様。ご武運を」

「うむ。道中気をつけて帰るように。武運を」

父はそのまま茂みに消えていく。

のしのしと、雑草を蹂躪し、突き進む姿はまさに熊だった。

結果的に、山賊達が捕まることは無かった。

複数の武器のみが押収されたのだ。死体は無かったらしい。

山賊達が持ち帰ったのかもしれないし、猛獣に食われたのかもしれないかった。

ただ、遺跡の前と、遺跡の中に残った血の跡だけが『これは夢ではない』と物語っていた。

原理

「ウッド」

「なんじゃ」

明かりに照らされた室内の濃い影からぬっと枯れ木の老人が顔を出す。

窪んだ瞳の置くと、ぼろぼろのローブの奥は繋がっているように、真つ黒な色をしていた。

窓の外に写る暗闇よりも暗い色。吸い込まれそうになる。

「いくら食っても腹いっぱいになんなかったんだけど」

「成長期じゃろ」

「ちげえよ！」

がばつと布団を蹴り上げて上半身を起こした。

枯れ木の老人―ウッドは長くて縮れた真つ白な髭を撫でている。指は枯れ枝のようだ。

「絶対お前のせいだろ！こんな突発的に成長期が到来すると思ってんのか！」

台風だつてもうちよつと予兆みせるつてのによお！」

「大食いを恥らう乙女でもあるまいし、少し大人しいせんかい」

ほっほっほ、と大笑いした。頭から生えてるようにびくともしない王冠が揺れる。

薄汚れた王冠とその容姿は『死者の精霊』たるリツチらしい。

「両親が驚いてたんだよ」

「息子の口の悪さにか？」

「ちげえよ枯れ木ジジイ！伐採されてーのか！」

「まあ、しかたがあるまい。枯れ木のワシも、食わんと姿さえ見せれなくなるのじゃ」

「そうなのか？」

「リッチは生者のエネルギーを吸い取る精霊じゃからの。断食なんてしてみろ、末代先まで祟るぞ」

「恐ろしいこと言っなよ・・・」

「ま、主で末代じゃろうが」

「今に見てろ。子宝に恵まれてやる」

ほっほっほ、とウッドがまた大笑いした。不気味だった。

「それで主よ」

「何だよ」

「真面目な話じゃが。あの娘っ子を孕ませて子宝に恵まれるのか？」

「お前、ちよつと本名言ってみろよ」

「『枯れ木ジジイ』じゃ。主がよくいつておるう」

暖簾に腕押し。リッチに突っ込み。

反論してもまるで手ごたえが無い。これが人生経験の差、なのだろうか。

「すまんすまん、主よ。そうふてくされるでない。ふざけすぎじゃったの」

「用件を言えよ」

「うむ。主は、魔法の練習をせんでよいのか？」

「魔法？昼間にしただろ」

「あんなもん、ラジオ体操のほうがマシなレベルじゃ」

「お前、俺の元の世界しってるな？」

「ワシが言いたいのは『元主』の魔法の練習じゃ」

昨日も言った突っ込みを無視しながらウッドが続ける。
真面目なのかふざけているのか良く分からない老人だった。痴呆症かもしれない。

「ああ、それな」

「それじゃ」

「確かに、あの距離で外すんだもんよ。練習しねーと・・・あっ」

思い出した。

嵐のように時間が過ぎ去っていったためすっかり忘れていたが、自分が『ウオーターカッター』を使えるようになった理由や、失敗だったはずの指輪の効果のお陰で、魔力総量が飛躍的に増えた理由を聞いていない。

「この指輪、失敗品だったんじゃないかったのか」

人差し指を立ててみせる。何とか世紀少年という映画のボスみたいだった。

「主よ。そのポーズは覆面があって初めて効を為す」

「何もいわねーぞ、枯れ木ジジイ」

「しかも手が逆」

「話を聞け！」

一変して、ウッドが髭をいじくりながら黙り込む。
むすつとしていると、本当に死者の精霊なんだな、と思わせる。
闇に紛れ、影に溶ける。おぞましい怨霊に見えた。

「主よ、フラッシュメモリーというモノを知つとるかの」
「フラッシュメモリー？・・・あー、使い方だけ。原理とかは知らん」

前世の職のイメージだと、パソコン関係は滅法弱そうだが実際そうではない。

『カモ』と呼ばれる人たちのデータを、
たつぷり溜め込んだフラッシュメモリーが驚くような値段で取引されたりするのだ。

「まあ、それに刺激されてその指輪があるわけじゃが」
「そりゃ書いてあつたな」

指輪のついた人差し指で本棚を指す。
歴史書や、社交マナーの教科書にまぎれてお粗末な本が突っ込まれていた。

「ま、フラッシュメモリーに限った話ではないそうじゃが、主らの世界じゃと、記憶媒体というものがあるんじゃない？」

「あー・・・あるなあ、確か」
「なんでも1と0で構成されているとか」

だつたかなあ、と。

専門ではないので仕組みや原理は全く分からない。
普段使っていたパソコンだって完全にブラックボックスだった。

「それでじゃ。その小さい指輪をつけると、電気信号が流れて、魔法技術を主に上書きする。」

これが指輪の原理じゃった」
「その程度で魔力が増えるのか？」

ウッドはさあのお、と首をかしげた。

「魔力量が精神力に依存していると考えれば、不思議な話でもあるまい。」

精神力とはつまり、脳の力なんじゃろ。

脳は電気信号を用いて動いとるんじゃろ？」

サイエンス誌にでも乗りそうな話題だった。

脳科学専攻の学者から言わせればこんな低レベルな話題、載らないよと言われそうだが。

「とにかくじゃ。主に上書きをしたが、上書きは未完全に終わったようじゃ。」

じゃから、主は得意系統ではない火も風也使えんかった。

そのかわりに、土と水が使える。そういうことじゃろ」

「そんなもんなのか？えらい簡単に言うじゃねえか」

「ワシも詳しくは知らんのじゃ。・・・それでじゃ」

ウッドが続ける。

「元主の水魔法を練習すればよいのではないかと思つての」
「なるほど」

「ついでに土魔法もじゃ。もし、上手く水と土の魔法が上書きされているとするなら、

主は水と土のスクウェアメジとなるわけじゃ」

スクウェアメジ。天才中の天才。エリート。

領地を手に入れるという夢への距離がぐっと近づいた。

「じゃあ、そのえーつと・・・何さんだっけ」

「ヴィクトル」

「そ。ヴィクトルさん。・・・その人の使っていた魔法を教えてくださいねーか」

「ほっほっほ。無理じゃ。殆ど忘れてしまったわい」

軽くそう返された。

本当に痴呆症なのかもしれない。本名を言わせたくて仕方が無い。

「まあ、そうカッパしなさんな、主よ。忘れたということは思い出すということ。」

そうじゃの。昨日みたいに咄嗟の時に思い出すかも知れぬ。

どうじゃ。どこかで実戦経験をつんでみてはどうかのお」

「そうは言っても父様が許さないと思うけどな」

父親の狼狽した様子を思い出した。

あの調子だと、一人の外出はしばらくは禁止にされそうだ。

下手すれば従者であるアリーヌを連れての外出すら難色を示しそうだった。

「では、ウォーターカッターの練習でもするかの。」

10m離れて命中率90%。これが最低ラインじゃと思うんじやが」

まあ、元主は100m離れようが当てることが出来たがの、と加えた。

いくら魔法を習得できたとして、技術までは無理なようだった。

指輪が完全なものであったなら、可能な話だったのかもしれないが。

二名

1年の月日が流れた。

表向きにはまだドットメイジだ。

警備隊の援護のため、

コンデンセーションで水を集め錬金で粘着性の物体を作り、水に溶かして操りながら

敵を拘束するというスペルを開発した。

凝縮と錬金の上手い使い方だと両親も褒めちぎる。

ラインに昇格するのは時間の問題だと。誰もが祝福した。両親は本当に嬉しそうだった。

ただ。未だにこの領をグラモン領から独立させる手はずが整っていない。

「ルノーよ、いい報告がある」

いつもよりもうきうきして帰ってきた父親が、夕食の席でそういった。

いつか見たド・グラモン家の長くて豪華なテーブルではなく、大きな丸いテーブル。

それでも3人が食事を摂る事に不自由は無い。広すぎるくらいだ。

「何でしょうか、父様」

「うむ。グラモン元帥が、ルノーの活躍を耳にしたらしくてな」

元々追い立てる行為は得意ではなかったが、ウッドとの協力により、野盗逮捕は捗っていた。

闇にまぎれるウッドの視界を共有し、不意打ちする。

これで、攻撃魔法を一切使わずに野盗を確保できたのだ。

攻撃魔法といえば。

この体は膨大な魔力を手に入れた代わりに、随分と制約の多いものになってしまったらしい。

いつか枯れ木の老人、ウッドから『ジャベリン』を教わった。

魔力量的に全く問題が無いと彼は言っていたが、結果は失敗に終わった。

アイス・ウォールやスリープ・クラウドもだ。

一定以上の高度なスペルは使えないらしい。

使える高度なスペルはかの厭世家、稀代の変人、魔法の天才のヴィクトルが作ったオリジナルスペルのみ。

今自分がまともに使える攻撃魔法は二つ。1年前よりも一つ増えたのだ。

一つ目は『ウォーターカッター』。

高圧の水流で敵を切り裂く魔法。依然として命中率は安定しない。

二つ目は『パラライズ』。

いつだったか、ウッドが思い出した氷のスペル。

薄汚れた指輪をはめた左手に触れたものを凍らせる呪文だ。

人体に対して行ったことは無いが、小型の野獣で実験したところ、威力は絶大だった。

触れられたかと思うと体は徐々に凍りつき、抵抗も出来ず息絶えていった。

水の魔法が得意とする『命の流れ』を強制的に凍りつかせる呪文らしい。

恐ろしい呪文だと思った。命の枯れる絶望感を感じながら死ぬなんて。

前世を思い出す。怒声ときつい疲労感をまだ体が覚えているらしい。つい身震いしてしまった。

「それでな。グラモン元帥直々に、ルノーの二つ名を考えてくれたらしい」

「ホントですか？すごいわ、ルノー！」

「おめでとうございます坊ちゃま」

母親が手を合わせて感嘆する。それにあわせて従者が嬉しそうに笑顔を見せた。

絶望感を思い出していた体に、暖かいものがじんわりと染み渡る。ついつい釣られて笑顔になると、体の底から『嬉しそうじゃのう』としやがれた老人の声がした。

「おめでとう、ルノー。それで、二つ名だが・・・」

二つ名。

メイジにとってあだ名のようなものだ。

役職、系統などによって誰かから賜ったり、自ら名乗ったりするものらしい。

たとえば父は『冷水のオーギュスト』。母は『石膏のエジュリー』。アリーヌは中々教えてくれなかったが、ある日折れたらしく教えてくれた。

私がまだ貴族を名乗っていたときは『炎塵』と呼ばれていましたよ、と。

「土流。土流のルノーだ。どうだ、中々言いえてると思わないか」

土と水を主に使うメイジなのだ。自分は。

確かに土流はしっくりくる。拘束専門に開発したドットスペルは、迫り来る土石流を思い出させる。

「ええ。気に入りました。どうか、僕の変わりにグラモン伯に感謝の意を」

「承った。これからは土流と名乗るがいいぞ」

豪快に笑い、父親はワインをぐいっと飲み干す。

随分嬉しいらしく、アリーヌや母親にも赤紫色のワインを薦めていた。

目標

「のう、土流のルノーよ」

「やっぱ聞いてたか」

食事を済ませ、自室に戻ったときにウッドがそう言って来た。

初めのうちは影にたたずむ墓場の精霊が、部屋にいることに内心ぎよっとしたのが

人間、慣れればどうってことはない。

ドクロに皮をかぶせただけのような不気味な顔も、虚無の暗闇に繋がっていそうな目も、

ボロボロのローブから見える枯れ木のような腕も。

見慣れればどこか愛嬌を感じた。

「お前の二つ名は何だったんだ？」

「成仏させる気かの、主よ」

枯れ木の老人、ウッドは『リッチ』という種族らしい。

リッチ。ここに転生して13年。聞いたことの無い種族だった。

もしかしたら、この辺りには生息していないのかもしれない。

この『リッチ』は、自分のことを墓場の精霊と言った。

精霊のような便利な先住魔法を使いこなすことは出来ないが。

それでだ。『リッチ』というのはみな元人間らしい。

ウッドも例外ではなく、昔は大貴族だったそうだ。

本人いわく『侯爵』だそうだが、彼の性格からして真偽の判断が難しい。

このリッチは不死を得る代わりに制約に縛られるそうだ。

曰く、『前世の名を名乗ると成仏する』。

「二つ名もダメなのか？」
「ダメじゃないかの」

ほっほっほど大笑いした。見た目は死ぬ寸前の老人だが、性格はひょうきんだった。

彼のこの性格のせいで中々話が進まないことが多い。

「二つ名。懐かしいのう。確か『極寒』だったような気がするぞい」

ウッドは水のトライアングルメイジだったのだという。

彼の使う魔法は確かに水の魔法ばかりだ。

もっと正確に言うと、風の魔法を織り交ぜた『氷』に関する魔法ばかりだった。

「へえ。アンタのギャグが寒かったからそんな二つ名なのか？」
「あたりまえじゃ」

胸を張った。暖簾に腕押し。もう会話するのをやめようかな。

「ときに主よ。ワシがいいプランを考えたのじゃが」

「・・・一応聞いてやるよ」

「使用人孕子宝大作戦じゃ」

「もうお前還れ」

大笑いした。さすが極寒だといいたい。影に溶けていなくなならないかな、こいつ。

「冗談じゃ。主はいつか語ったの。この領地を『委託』ではなく『独立』した領地にしたいと」

「おう。確かに言ったなあ。てめえにも脳みそがあったことに驚き

だ」

「インテル搭載じゃ」

「お前」

「インテリジエンスの略じゃよ、主よ」

言いかけて口を挟まれた。絶対後付けだ。

「それでじゃ主よ。あの本の後半ページを殆ど使つとらんが、もつたいないとは思わんか？」

「後半？・・・あー、秘薬の調合かなんかがかいてあるんだっけ」

左人差し指に今も巻かれている薄汚れた金色の指輪。

莫大な量の魔力を得る代わりに、殆どの魔法が封印される代物。それと一緒に持ち主ごと眠っていた手作りの粗末な本があった。

汚い日本語で書かれた本だ。そういえば、殆どあれのページを開いていない。

時々、前世の故郷を思い出してページを捲っていたのだが、殆ど真面目に開いていないのだ。

「アレを駆使して金を稼いではどうかの」

「いい考えかもしれんけど、領地を手に入れる夢とどう関係あるんだよ」

「ほっほっほ。主のおつむは残念じゃのう。ワシはこの事情を聞いたときに閃いたというのに」

「閃いただと？ヒラメがいた、の間違いじゃねえのか」

「・・・主よ、『極寒』の二つ名は主のモノじゃ」

同情された。本気で哀れんだ目でこっちを見る。

「・・・んで、何だよ。何を閃いたっていうんだ」

「領地を買いえばいいんじゃないよ」

領地をかう。

突拍子でもない意見だった。

隣の国のゲルマニアは領地をかうことができ、金さえあれば誰でも貴族になることができるそうだ。

しかしここはトリステイン。

頭でっかちの貴族が、領地買いなどと卑しいマネをするはずがない。許すはずない。

「やっぱ極寒はてめえの二つ名じゃねえか。かうことは不可能だ。ゲルマニアに帰れ」

「つれんのう。老人の話はゆっくりと聞くべきじゃと思わんか」

「何だよ。言ってみろ」

「よしきた。ド・グラモンは貧乏じゃ。知つとるな？」

言うとおりに。グラモン伯は派手好きだ。

でかい領地を持っている分、実入りは多い。

しかし、それを上回る分出資。噂によると結構な額の借金しているらしい。

「概算で5万エキュー。これで交渉はできると思うがのお」

「交渉？」

「そーじゃ。グラモン伯からして、この領地は美味しくない。そりゃそーじゃ。

産業も殆ど無く、山賊ばかりの領地じゃからの。

そこでじゃ。いつも父がお世話になっているから、この金貨を納めて欲しい、と。

そろそろ自分たちヴォージュ家もグラモン家と良好な関係を保ちながら独立したい、と」

要するに首の回らなくなっている領主に袖の下を渡すわけだ。確かに借金を帳消しにするくらいの金額だった。交渉の余地はあるかもしれない。

「そんで、大金を得るために秘薬ってか」
「そーじゃ。いいプランじゃろ」

5万エキュー。この家が建つくらいの金だ。そう簡単にいくとは思わなかった。

「さて、その金額を手に入れるのに、どれくらいかかると思ってるんだ」

自分の年は13。2年たてば魔法学校に入学する年だ。下級貴族が魔法学校に入学することは珍しい。

しかし、自分に魔法の才を見出した母親が、入学を強く推した。父もやぶさかではないと、入学に同意した。

貧乏貴族ながらも学費を捻出できる辺り、父親の資金繰りの上手さには舌を巻く。

「夢じゃろう？夢を掴むためには努力しなきゃならん。

一人で理屈をこねているのは簡単じゃ。限られた環境で同じ事を繰り返すのは楽じゃ」

ウツドの言葉に前世の自分を重ねる。限られた環境で同じことを繰り返す。

仕入れて、売って、遊んで、仕入れて。

運んで、遊んで、運んで、遊んで。

犬みたいにならずと同じところをぐるぐる廻っていた。ぐるぐる、ぐ

るぐると。

生まれ変わったら、まともな人間になろう。

そう死に際にぼんやり考えたのを思い出した。

両親の笑顔を思い出した。

何だかんだ言いながら、両親は名誉のため、誇りのために領地を欲しがっている。

だから。そのために。

無理をして魔法学校に入学させてくれようとしている。

拳に力が入った。それから、左手にはまった金の指輪を見た。

厭世家の残した不思議な指輪を。儚い夢を後押ししてくれる、頼りなく光る金色。

「・・・やってみるだけ、やってみるかなあ」

「よしきた。実を言うとワシは暇だったんじやよ。

昼間、だーれもいないところで1時間の訓練するときくらいじゃもん。ワシが魔法使えるの

それに主とのトークタイムもこの夕食後のひと時だけ。暇で暇で二度目の臨終を迎えるかと思ったわい」

彼の意見を勝手に深読みしすぎたらしい。

思わず固めた意志が砕けそうになった。

「・・・理由はともかく、やってみる。んで、具体的にはどうするんだ」

「あー、そうじやの。とりあえず、ワシと初めて会った遺跡の近くに村があつたじやろ？」

そこに家でも建ててゐるかの」

「家?! 何言つてんだ。糞碌ジジイ。二度目の臨終をさっさと迎える」

「ほっほっほ。主が死ぬときがワシの二度目の臨終じや。

・・・別に家じゃなくてもいいんじゃないが、とにかくあそこ辺りに塀が欲しい」

「理由を言え」

「家だけにかの？」

「理由を言え」

「家だけにのう」

「り、ゆ、う、を、い、え！」

やれやれとウッドが肩を竦めた。

「あの遺跡に鏡があつたのを覚えておるか」

「鏡？」

記憶のページを捲る。

人生で最も密度の濃い日だった。忘れるはずも無い。

ぼろい石箱に、日本語が彫つてあつて、それが開いて――

そつといえばあつた。酷い顔をしていた自分を映した全身鏡が。

「思い出したかの？」

「ああ、思い出した」

「ありやな、マジックアイテムなのじゃ」

「意味ありげに置いてたもんな」

「じゃろ。それでじゃ。あの鏡を通ると、ゲルマニアのとある遺跡へ出ることが出来る」

「は？」

大口を開けた。この老人はどうして重要なことを言わないのか。

「は、じゃあるまいて」

「・・・なんで黙つてたんだよ！」

「別にとりたてて騒ぐようなことでもなかる？」

「騒ぐわ！騒ぎまわるわ！」

「ご近所に厳しいクソガキじゃのう」

「うるせえクソジジイ！」

お互い子供じみた蔑称で呼び合った後、しばらく沈黙。
ウツドは面白そうににやにやしていた。

「それでじゃ。あのポーシヨンの調査書は基本的にゲルマニアにしか生えておらん植物が材料じゃ。」

元主がゲルマニアの出だからの。ゲルマニアの植物を採り、調査してこっちで売る。

中々に馬鹿にできん利益が出ると思うがのう？」

幸いにして自分は調査を唱えることが出来る。

土の基本呪文、錬金を合わせれば大体のポーシヨンはできそうだ。

ゲルマニアにしか生えない、珍しい薬草。これを使ったポーシヨン。需要はありそうだ。結構な利益が見込めるかもしれない。

「どーじゃ。目から鱗が溢れておるぞ。生臭いのう」

「気のせいだ！」

反射的に返しながら思案する。

悪くない案だった。5万は無理かもしれないが、学費分と埒代、生活費くらいは稼げそうだ。

そうすれば、とりあえずこの家の負担が減る。

「悪くない案だ。採用」

「ほっほっほ。では、明日にでも父親に直談判するがよいぞ」

紹介

魔法の修行と自分の学費を支えるためのポジションを作るため、と半分本当というか、上手く量した理由を説明し、メリットを説明し、父親を説得した。

説得は案外簡単だった。というか楽勝だった。感極まった父親は思いつき自分を抱きしめた。大きな男になるのだ、と涙声で。

母親も自分の修行は賛成だと言った。感動した様子で、あなたが息子でよかったわと小さく呟いた。

順風満帆だった。楽勝だった。ほくそえみそうになった。が。思わぬ伏兵がいたのだ。

アリーヌ。

出合った当時は13だった、自分と10違いの従者。

今は自分が13歳だった。彼女はもう、23歳になる。

前世の感覚で言うともだまだ結婚適齢期だが、

この世界は違うようで、すでに行き遅れだった。

母親は、しきりに結婚を勧めていた。下級貴族の五男が嫁を募集しているのよ、だとか。

従者と主人の関係というより、行き送れの娘を心配する母親と娘の関係みたいに見えた。

彼女と出会ってから10年。彼女は家族の一員みたいになっていた。

その彼女が。反対したのだ。

その姿はまるで弟を憂う姉のようだった。

何とか。何とか押し切って、彼女を言い聞かせようとした。

結果的に言っていると押し切れたというより、押し切られたといった感じ

だった。

条件付の一人暮らし。

アリーヌがついていくことが条件だった。

「何のかんの言って、結構立派だなあ」

小屋みたいなものでいいといったのだが、母が鍊金を頑張ったらしい。

前世の感覚で言つと一家族が余裕を持って暮らせそうな家が建っていた。

「奥様も、旦那様も、坊ちやまがお大事ですから」

うんうんとアリーヌが言った。

長くなったウェーブのかかった茶髪が揺れる。

20を越えているとは思えない容姿。童顔だからだろうか。

逆に自分は父に似て、がっしりとした体つき。身長もそろそろ170の太台に乗る。

顔も、残念ながら老け顔だ。言つてて哀しくなる。

それでも前世より顔はよかった。改めて死にたくなる。

（ワシはこっちにきてても普通に日の照つてるうちから外に出れんのかのお）

（前だつて出てたじゃねえか）

（一時間だけの・・・で、どうなのじゃ主よ）

（それだけだな・・・やっぱ限界かな、とか思っんだよ。ある程度、説明しようと思う）

（ワシとしてはありがたいが。主はそれでよいのか）

（アリー又は口が堅いんだよ。おねしょも黙っててくれたし）

綺麗に描かれた、この世界には無い日本列島を思い出した。

（ほっほっほ。そうかいそうかい。ま、テキトーに話をあわせるとするかのう）

「何だか新婚さんみたいですね、坊ちゃま？」

家に入ったと同時に嬉しそうにアリーヌが言った。そうかもしれない。

童顔の彼女と、老け顔の自分。共に15、16くらいに見える。

両親には修行なので身分をちらつかせるようなことはしないで欲しいといっていた。

感動した父親に、また締め付けられたのだが。がっちりした体つきでよかった。

「僕が老け顔って事でいいのかな、アリーヌ」

「うふふ、まさか」

語尾に音符がつきそうなくらいご機嫌で、見回すようになってくるりと回転。

茶色の髪の毛がドレスのようにふわっと広がった。

玄関から入って、すぐ右がキッチンとダイニング。

左は2階に通じる扉があって、二人の部屋はそこになる。

風呂は外の簡素な小屋だ。

井戸から水を引っ張って水をためれるようになっていたのだが、彼女がいれば問題ないだろう。

「ところで、アリーヌ」

「何でしょう、坊ちやま？」

くるりと振り返り、小首をかしげた。彼女のクセだ。

「重要な話があるんだけど、いいかな」

こつこつとダイニングに向かい、テーブルの下にしまわれていたイスを引いて座った。

アリーヌもそれを倣う。

「重要な話……ですか。……ちよ、ちよっと待ってくだ
さいっ」

考え込んで、アリーヌの顔が真っ赤になった。

ぼふつと煙が頭上から飛び出しそうだ。まるでスチームポッドみたいだと思った。

「坊ちやま、坊ちやまの気持ちは嬉しいのですが、身分の違いが・
」

いや、でも私は元はいえ貴族……となにやらぶつぶつ呟いてい
る。

無視して話を続けた。

「こつちを見てくれ」

「えっ、は、はい……」

闇から出でたウッドを見て、金切り声が新築に響いた。

> i 3 5 1 4 5 — 4 4 1 1 <

計算

「すみません、取り乱して・・・」

アリーヌが恥ずかしそうにうつむいて、くるくると指で髪の毛を巻いた。

「いや、あの反応で普通だ」

「ワシはガラスのハートが砕けそうじゃったが」

とりあえず、日本語の件は暈して話すことにした。
案外すんなりと信じてくれたようだ。

突然つけたした汚い指輪に、増えた食事量。

才能無しと、あきらめかけた魔法の才能が開花したこと。

全て合点がいくらしい。納得したようにしきりに彼女は頷いた。

「えっと、ウッド・・・さん？」

「なんじゃい、若い娘さん。ダンスのお誘いかな？」

「脚も無いくせに何言ってるんだよ」

「えっと、これから、どうぞ・・・よろしくおねがいします」

おずおずと差し出した右手をウッドが掴む。

2、3回それを振って、どちらとも無く手を離れた。

「ま、そういうことだから。日中はウッドと一緒にゲルマニアまで出かけるよ」

「はい。留守は任せてください」

ますます新婚夫婦ぽかった。

現に近所の住人も新婚かい、いいねえ、と挨拶に来ていたくらいだ。仕事を聞かれたときは少し焦ったが。とりあえず自分は警備隊から派遣された見習いということになっていた。

「どこに売るか、とかはまた追々考えるとするか」

「そうじゃの。とりあえずゲルマニアに出向いて、ポーションを作ることが先決じゃ」

「とりあえずここの代金・・・ええと、400エキューだったか。それを稼ぐ。」

「じゃないとマイナスだからな。次に生活費か」

生活費に対して援助は一切無かった。断ったからだ。

「日当たり10エキュー稼ぐくらいでいいんじゃないかの」

「10エキューか・・・」

庶民の平均生活費が一人当たり3エキュー。

その3倍の金額を稼がなければいけない。傭兵にでも身を賣さない限り、難しいかもしれなかった。

仮に、傭兵になったとして、毎日10エキューもの金が入るわけではないのだが。

行動してから気づくが、自分の行動は浅はかだった。

両親が『金の心配ならいらない。辛くなければ支援をする。魔法の特訓を第一に考えなさい』

と言っていた意味が分かった。

「何か、気が重いな。・・・とりあえず、どのくらいで売れるポーションを調合できるかが重要だな」

「じゃのう。銭勘定は明日からじゃ」

楽天的にウッドが笑った。

採集

翌日。

澄み渡った空気は、森林に囲まれたこの町ならではの。

アリーヌに見送られ、近所の農夫と挨拶を交わし、遺跡まで出向いた。

真っ赤に染まっていた草は、当たり前のことなのだが深い緑に戻っていた。

アリーヌはポーションを売るあてを探してくれるらしい。

頭が下がるばかりだ。高く売れるポーションを調合できればいいのだが。

「さて、主がトラウマと向き合っているところ悪いんじゃないが」

「何のトラウマだ」

1年前の事を言っているのだろうか。

石棺に手を合わせたウッドがこつちを振り向いてそういった。

棺の蓋は開いたまま。あの時と少しも変わらず、白骨死体は指を胸辺りで組み、眠っている。

「その鏡の中に入るのじゃ」

「中？」

頷いた。

「手をつっ込み、脚をつっ込むとよい。あれは鏡に見えるが、『扉』なのじゃ」

「うーん……。よくわからんが、言っとおりにやってみるわ」

もう一度ちらりと白骨死体を見てから、鏡に向き合う。
ライトのスペルで光った杖先が眩しい。

「恐れることは無いぞ」

「こわかねーよ」

強がりを言いながら手を鏡に向ける。

ひんやりとした硬い感触もなく、手は鏡の中に入った。

自分を映した鏡が、水面のようにゆっくり波打っている。

「・・・なんでもありませんだな、魔法って」

「そーでもないんじやが。まあ、主は頭が弱いから何でもありに見えるんじやろって」

よく出来た科学は、魔法と区別がつかないらしい。それと一緒になのだろうか。

反論しようと思ったが、言っていることが正しかったので反論できない。

目を閉じて一気に鏡の向こうへ歩みを進めた。

鏡の向こうの景色が劇的に変わっているわけもなく。

目を開いた先は、石箱よりも狭い空間。

ライトで照らさないと一切光が入らない、よどんだ空気の漂う場所だった。

前世の体には『埃アレルギー』という一生治らない状態異常がついていたが、この体はいたって健康だ。

もし、前世と同じくアレルギーだったなら、くしゃみが止まらなかっただろう。

「なつかしいのう」

背後から、しゃがれた声。枯れ木の老人、ウッドだ。

「ほれ主よ。進むぞい」

「どこにだよ」

見た限り、横幅2m、奥行き4m程の狭い空間に、別の場所に繋が
りそうな所は無い。

さっきの場所と同じく、固定化がかけられているらしい白い石で出
来た床と壁が続くばかりだった。

とりあえず天井を見る。高さは結構あるようで、ライトで照らして
みてもうつすらとしか先が見えなかった。

「一番奥にはしごがあるはずじゃ」

「ああ、地下なのか、ここ」

こつこつと奥へ進む。

やけに真新しい木製のはしごが立てかけられていた。

それを使い上へあがる。

はしごに脚をかけるたび倒れるのではないかと思ったが、どこかで
固定されているらしく全く揺れない。

慎重に梯子に脚をかけ、指をかけ登っていく。高い天井も直ぐに終
わりが見えた。

「そこに蓋があるじゃろ？」

「これか？」

四角い枠に、とつてのようなものがちょこんとついていた。

手にとって押してみるがびくともせず、逆に引いてもびくともしな

い。

「おい、うごかねーぞ」

「む・・・」

浮遊して、自分の背後に立っているウッドが首をかしげる。
ふわふと上下にいったり来たりしながら白い髭を撫でた。

「ああ、ちょっと待つがよい」

ぶつぶつとウッドが何か唱えたかと思うと、かちんと小気味のいい音がした。

開錠の音らしく、さっきと同じくとつてに指をかけて押すと重たくはあったもののゆっくり蓋があがっていく。

みしりみしりと音がした。

この上に土が乗っているらしく、さっきからよく肥えた濃い色の土が自分の金髪や服を汚していく。

不愉快に思いながら一気に力を込めると、蓋が直角くらいまで開き、土がどさどさと落ちてきて足を踏み外しそうになった。

「ほっほっほ。野生児みたいじゃの」

「これ、設計ミスってんじゃないのか」

蓋を開いた先から太陽の光が惜しみなく入ってきている。

梯子を登って覗くと、コケの生えた古い長方形の石が不規則に並んだ場所だった。

「ワシの故郷」

「墓かよ！」

地上に出て、体と頭についた土を払いながら見渡す。

古い墓場のようで、手入れされた形跡どころか人の踏み入った形跡すらない。

背の低い雑草が自由にあちこちに伸び、墓石の殆どは土に埋まり、傾き、その体をコケに侵食されていた。

「ふうむ、昔の馴染みでもいるかとおもったのじゃがの」

「生憎留守らしいな」

一足先に地上に出ていたウッドが残念そうに白髪を撫でた。

そもそも、幽霊は夜に出るんじゃないだろうか。

打ち捨てられた墓に不気味さはなく、どこか遠い時代の遺跡を見ているような気分だった。

足で開いた蓋をけとばして閉じる。土に汚れた白い石の蓋だった。

「さて、主よ、本を開くのじゃ」

「おうよ」

日本語ページとは逆の方向から開く。

丁寧で小さな字が規則的に並ぶ。日本語の筆者とは字の読みやすさが段違いだった。

調査する時にイメージすればいいもの。材料。効果。

分かりやすく纏められており、スケッチ風に描かれた植物も綺麗だ。間違えやすい種類の名前と、区別するときのコツがずらりと並べられていた。

「ところでこの辺りはどこなんだ？」

このリストは地域別の生えている場所で括られていた。

ゲルマニア、と一言で言ってもトリステインの倍以上広いのだ。

「どこじゃっけかのう。80年前はここは誰の領地でもなかったんじゃないよ」

困ったことを言い出す。

何だか、ここがゲルマニアかどうかすら怪しくなってきた。

「何かヒントとかねーのか」

「ヒント?・・・ヒントは、ゲルマニア」

神妙そうにそう言った。どこかしたり顔だ。

「知ってるわ!聖水でもぶっかけてやろうか!」

「15から25までの別嬪で頼む」

「下品なんだよ!」

「ほっほっほ。ワシは聖水を清めるための祈りを捧げてくれる、巫女の話をしたんじゃないかのう?」

「・・・俺の聖水で我慢すつか、ああ?」

「ほっほっほ。使用人の娘っ子にでもかけるがよいわ」

大笑いしながら続ける。

物体を透過する効果は無いらしく、ウッドも土に汚れていた。

「まあ、それは夜の話じゃな。

・・・話を戻そうかの。まだあるかは知らぬが、ツェルプストーという家がここの北の領地を持っておるぞ」

ツェルプストーといえはトリステインとの国境をはさんだ大領主だ。トリステインの大貴族、ヴァリエールとは犬猿の仲らしい。ということはかなりトリステイン側ということになる。

「あんましトリステインとかわからねえな」

「そうなのかや。しかしじゃ。中々に珍しいものが生えておる。どれ、いい場所を案内してやるか」

故郷に帰ってきた嬉しさからか、どこか浮き足立った様子でウッドが先導する。

道なき道をふわふわと浮きながら進んでいくが、地に足をつけないと移動できない自分は大きな苦労だった。

樹を掴み、緩やかな坂道に生い茂る草を踏みしめて進む。

歩を進めるたびにさばさと近くで鳥が羽ばたいた。

「ここじゃ」

「ここ？」

開けた場所に来た。

底まで見渡せる美しい湖が広がる場所だった。

湖に浮いたカモが、時折水面をつつく。

小鳥が周囲に茂る大木の枝に止まってはどこか遠くへ飛んでいく。

水中には深い青色をしたさかながすいすいと気持ちよさそうに泳いでいた。

「綺麗な場所だけど、どれだよ、ポーションの材料」

ぺらぺらとページを捲り、探していく。

これかな、違うか。と思案する。植物は案外似たようなものばっかりなのだ。

「これじゃよ、これ」

湖の縁に生い茂った芹に似た植物を指差した。

この芹。トリステインにも大量に自生したような気がするのだが。

「ああ、これ？」

やっと見つけたページを見せながらウツドに見せる。

嫌な予感がした。背筋に冷たいものを通る。

「それじゃそれ。トリステインには無いものじゃろ？」

「・・・」

大量に生えてる草だった。

数十年前、ゲルマニアから観賞用として輸入され、野生化し、どこにでも生えている種類だった。

薬草としての効能も薄く、庶民の傷薬として出回っている。

銅貨一枚で買える、リーズナブルで、主婦にも優しい草だった。

「・・・これ、トリステインにも自生してるし、効能も薄いんだけど」

ウツドの真っ黒な目ががっとな開いた。驚いているらしい。正直不気味だ。

「な、ならこれとかも」

焦った様子で指差したのははしばみ草だった。

恐怖の苦味を誇る、野菜フリークスしか食べないような野菜だ。

もしかして、とウツドに向けていた視線を手元の本へ向ける。

アロエ、ブラックベリー、ブラッドグラス、オダマキの根。

この周辺の括りの植物は、全てここ最近に輸入され、野生化した植

物ばかりだった。

その植物たちの効能は研究され、安価で市場に出回っている。

「おい、枯れ木ジジイ」

「な、なんでございましょう、主様……」

思いつきり下手だった。気づいたらしい。

「ここを良く見ろ」

「わたくし、目がありません故……」

目を合わせようとせず、すいーっと滑るよつに逃げようとする。

「その目に、ここに生えてる草、全部活けてやろうかあ?!」

「ワシじゃって、80年も眠ってたんじゃ! 知らぬことくらいある
!」

十数分押し問答が続いた。

お互いに息を切らして、しばし休憩。

「……おい枯れ木のクソジジイ」

「ノークレーム、ノーリターンで頼む」

オークションでよく見そうな決まり文句だった。

「お前はノーリターンじゃなくてノータリンだ」

「老人を責めてくれるな……」

よよよ、と病弱そうに傾き、わざとらしく咳をした。
呆れて本を見直す。

別の箇所も見だが、秘薬というよりか山簞り中、小さな病気や怪我に有効なポーションの作り方、材料だった。

この老人にそそのかされたのもあるが、ちゃんと確認しない自分の責任だった。

間違つて、兄貴分に会う時にだらしない格好で会いに行ったような、言いよりの無い不安感と絶望感が背筋をねつとりと撫でていった。

「す、すまんの。まさか元主がそんな下らんモンを遺すとは」

「くだらなくは無いけどな。まさに婆ちゃんの知恵袋ってかんじだぜ」

確かに役には立つ。山簞りをするなら、この本は必須かもしれないなかつた。

「とりあえず、草を使うのは却下だな」

植物のみを材料とするポーション以外に、亜人の臓物や血液を材料とする調合方法も載っていた。

今では一般的な調合方法だが、亜人は凶暴で、普通のメイジなどは亜人と対峙することを避ける。

もちろん、平民では手も足も出ず。需要に対し、供給が非常に少ない状態だ。

これならそれなりの値段で売れるだろう。亜人と戦わねばならないが。

「とりあえずポジティブにいこうかの。どれ、北上してツエルプストー領にでも行かんかの？」

ワシも数えるほどしかないが行ったことがあるのじゃ。案内して進ぜよう」

「はあ。そうするかなあ。情報でも集めるとするか」

酒場

1時間も立たない間に町へ出た。

ツエルプストー領の端にあるのにも関わらず、結構発展した都市だった。

ウッドがいうには昔はもつと田舎だったらしい。

街の人の話を聞く限り、トリステインと交流ができ発展したそうだが、トリステインに無い植物——もう一般的なのだが——が大量に自生する場所が近くにあるのだ。

納得のいく話だと思った。

「兄ちゃん、見ない顔だね？」

酒場の主人が手持ち無沙汰に干し肉をかじる自分に話しかけてきた。発展しているとはいえ、まだまだ小さな都市だ。よそ者かどうかは何となく分かるらしい。

「ええ、少し前にここに着いたので」

「傭兵かい？」

「いえ、旅商人です」

適当を言っでごまかす。

身なりは平民と同じような服に身を包んでいる。

杖も隠しているし、貴族には見えないのだろう。

もし、勢いに任せて家を出た貧乏貴族の落ちこぼれ長男です、なんて馬鹿正直に言えばどんな反応をされるか分からない。

大笑いされればまだいいものの、同情されたらあんまりの情けなさに自棄酒してしまいそうだ。

「旅商人か。珍しいね、今時」
「よく言われます」

苦笑い交じりに言う。

「何か美味しい儲け話、無いですかね」
「はっは。昔は交易でそれなりに景気がよかったんだがね。中々商売人に嬉しい話は無いよ」

主人が磨いていたグラスを棚に戻した。

中途半端な時間のため客は自分以外いない。主人は暇らしかった。

「傭兵にとつちや、美味しい話があるんだけどな。いや、美味しくないのかも」

「傭兵にとつては？」

「裏の山があるだろ」

「ええ。ありますね」

「あそこで怪物が出たらしくてね。ツエルプストー様がお触れを出したんだよ。」

怪物を退治した者に賞金500エキューを出す、ってね」

怪物。もしかしたらウッドの仲間かもしれないかった。

だとするならば、退治することは不可能だろう。何せ彼らは『死を知らない』。

「怪物っていうのは、どんな見た目なんです。まさか、幽霊のような？」

「あっはっは。兄ちゃん面白い事を言うな。違う違う。オーク鬼だ。」

この街に被害もちよくちよく出てるんだ。死人はいないけどな」

オーク鬼。人間の天敵だ。体長は2mを越え、体重は成人の5倍。人ほどある大きな棍棒を振り回す様は圧巻。

どの危険な亜人リストを見てもこのモンスターの名前があるだろう。

「ま、このお触れもあと2、3日くらいなもんだろうな。狩に行つた傭兵はとんと帰つて来ないしょ。

ツエルプストー様が直々に討伐隊を派遣するだろう。ありがたいもんだね」

「へえ、オーク鬼が湧いているのに人里に下りて被害を加えないなんて面白い話ですね」

「そうかい？あいつらだつておつむがついてるんだよ、兄ちゃん。山に迷い込んだ哀れな人間を食い、あとは山の動物で我慢する。結構このパターンが多いって聞くぞ？」

まあー、あいつらも学習してんのさ、と続けたところで客が入ってきた。

そろそろ昼時だ。客も増えてくるのだろう。

いらつしゃい、と元気よく言う店主にご馳走様と告げ、少し多めの代金をテーブルの上に置いた。

「ありがとよ、兄ちゃん。・・・って多いぜ？」

「ああ、面白い話を聞かせてもらいましたからね」

「・・・？まあ、そういうならありがたく貰うとしとくけどよ」

怪訝そうに首をかしげて店主は代金をとった。

背後からまた来てくれよ、と元気のいい声を貰い、店を後にした。

戦闘

「オーク鬼の集団に勝てると思っとなるのか、主よ」

裏の山、つまりこの街から西側の小高い山道を歩いている時にやつと姿を現したウッドが言った。

「手ぶらで帰れるか。いい訓練になるだろ」

「いい訓練にはなるがの、主よ、ロクに亜人と戦ったことなんてないじゃろ」

「大丈夫、命中率は60%オーバー」

「・・・主よ、ヤケになつとらんか」

半分ヤケだった。初日から塹代を稼げる。やらない手は無い。が。

それは危険を伴う。大きな危険だ。

両親も、息子がこんな危ないマネをするとは思っていないのだろう。平和に。ただ平和にポーシヨン調査に精を出していると思っっているはずだ。

「・・・ヤケっちゃヤケだな。でも、500エキューは大きいぞ」
「主の命よりの」

大笑いして肩をばんばん叩かれた。

「俺の命が500エキュー以下だとしたら、テメーの命は5ドエニ以下だな」

「ほっほっほ。ワシの命は非売品じゃ」

何せ死なんからの、と言いながらおかしそくに笑った。

細い小道はどんどん植物の侵食を受け、もつすでに獣道になっていた。

ばさばさと大型の鳥が頭上を通り、行く道に小型の獣が横切る。

木々のお陰でいい天気なのに日光がさえぎられ始めた。

どこか不気味な雰囲気だ。近いのかもしれない。

そう思ったときに、こつんとつま先に何か触れる。金属質な感触だった。

「なんだこれ」

呟いてほぼ反射的に何も考えず足元の物体を拾い上げる。
半円で、鉄製。ヘルメットのようなものだ。

「兜じゃの。ほれ、血がついとる」

「んあ……。マジだ」

くるりと裏返すとちよつと引いてしまいそうなくらい、真っ赤な塗料がついていた。

鉄くさい。不気味な雰囲気の一端を担うのは、鉄の匂いかもしれなかった。

よく周りを見回すと、所々草がへこんでいる。

武器か防具がそこに散っているらしかった。

「食い散らした後じゃのう」

オーク鬼はまるで蟹の殻をちらげる人間のように鎧をちらげたのだろつ。

だとすれば、ここはもう敵の領内かもしれない。

少し足早に進む。目の前に開けた場所があったからだ。

「おおぅ?!」

がさりと音がして、背後からうなり声が聞こえた。

それと同時にぶうんと鈍く風を切る音がした。

何とか直撃には至らなかったが、風を切る音の現況がわき腹を掠めた。

振り返らずに大またで4歩、よろけるように背後から襲ってきた者と距離をとった。

くるりと踵を返し、思わず体制を崩して方膝をつく。

顔を上げると恐ろしい顔のオーク鬼が棍棒を握って立っていた。

「ここが巢みたいじゃのう」

「楽観的だなアンタ」

「ワシに乗って逃げようなどと考えんようにの」

分かっていた。

リッチの移動速度は遅い。いつもは自分の影に溶けているため余り気にならないが。

ぐぐぐぐ、とうなるオーク鬼に杖を向ける。

ウッドは周囲を警戒しているようだ。戦闘に参加する気は無いらしい。

「ウォーターカッターっ」

細かく散った水滴が霧状になる。細い水流は一直線に勢いよくオーク鬼に向かった。

泡のせいで水流の色は白みがかった青色。霧と相まって稲妻のよう

だった。

水流は1秒もかからない速さでオーク鬼の肩を貫いた。頭を狙ったつもりなのだが、やはり実戦となると焦りもあり命中率がさがるようにだ。

ぎゃあああつと獣じみた叫び声をオーク鬼があげる。手に持った棍棒が滑り落ちた。

完全に無防備。今まで人間を楽に倒してきたようで、油断したのだろう。

ついた片膝をあげて一気に近づく。3mほどの距離がすぐに0になった。

オーク鬼の大きい腹に左手をあて、パラライズのスペルを唱えた。

「パラライズっ」

命の流れを凍らせるスペルだ。

ぱきぱきと音を立ててオークの腹が凍り付いていく。

苦しそうにオークが後ろにゆっくり倒れながら手を振る。

大きな体のため、完全には凍り付いていないが、それでも徐々に彼の体力を奪っていくだろう。

背中から倒れたオーク鬼は振り回していた手を広げて大の字になる。腹から発生した氷は徐々にその領地を増やし、胴体を完全に覆っていた。

「まずは一匹。・・・一匹ですんだら楽なんだけどなあ」

「そうはいかんじゃろ。いくつか気配があるの。10匹くらいかの警戒しとるみたいじゃ」

「そうか・・・。・・・10?!」

驚いた。背後のオーク鬼が最後の息を吹き終え、こふつと言ったが、そんなのどうでもよかった。

10匹。人間10人に囲まれても厳しいというのに。

「体勢を取り直す！」

「無理じゃろ。くるぞ……。ウィンディ・アイシクル」

がさりと草が揺れた瞬間、そこに向かい複数の氷の矢がウツドの枯れ木のような腕から飛び出した。

物凄い速さで飛んだそれは命中したらしい。草陰からうなり声が聞こえた。

「む。硬いのう。軽症じゃ」

ぐるる、と憎らしげな声をあげて、草陰からオーク鬼が顔を出した。頭に2箇所、胴体に4箇所傷を受けて血を流しているが、腹の1箇所以外は殆ど血を流していない。

それに目を奪われていたときだった。左の草陰が大きく動いたのを視界の端で捕らえた。

「しまったっ……。！」

横に大きく跳ぶ。左腕をまげて首を軽く下げ防御体制をとる。

オーク鬼の拳が凄く速さで迫ってきていた。このまま行けば左の腕ごと首を砕かれそうだった。

「アイスウォール」

しゃがれた声が聞こえたと思うと拳の影をさえぎるように半透明の氷の壁が出現した。

出現した瞬間にぱりんと派手な音をたててそれが割れる。

割れたと思ったときには視界がゆれ、草陰の恐ろしい怪物ではなく

空を見ていた。

「うつごおっ・・・！」

吹っ飛ばされたいらしい。背中に鈍い痛み。左腕には鋭い痛み。もう左腕は使えなさそうだ。パラライズを封印してしまった。

「主よ、大丈夫かの」

少し遠くでしゃがれた声が聞こえた。

すぐにその声をさえぎるように獣じみた声が響き、ぎゃあ、と情けない声をウッドが上げる。

リッチは幽霊のような見た目と反して触れることが出来るのだ。物理攻撃を食らってしまうのだ。

ただ、吹き飛ぶことは無い。その場でとどまるだけ。

これが余計にたちが悪い。老人の痛ましい悲鳴と殴りつけるばすばすという鈍い音が森林に響いた。

「つて、うおおおっ！！」

いつの間にか自分たちを囲っていたオーク鬼が続々と草陰から出てきていたらしい。

大の字に寝転がる自分の頭目掛けて棍棒が振り下ろされていた。

ごろんと一回転してそれを避ける。左に回ったため、ぐきりと嫌な音がして激痛が脳みそを刺した。

「アブねえっ！」

そのまま勢いを利用してたちあがる。3匹のオーク鬼が目の前にいる。

首をばつと動かし周りを確認した。
自分とウッドとの距離は6mほど。
ウッドを囲うように殴っていたオーク鬼の一匹が吹き飛ばされた。
彼を襲う担当は4匹。うち一匹は吹き飛ばされた。
自分から見て右に2匹、襲いかかるうともせず、手持ち無沙汰そうににやけるオーク鬼。
左にも2匹。予備の隊員なのだろう。自分が担当しなければいけない敵は合計で7匹らしかった。
あまりにも絶望的である。痛み of せい、恐怖 of せい、膝ががくがくと震えた。

「ウォーターカッターっ！」

目の前のオーク鬼に撃つ。

ひょいと体をひねってそれを回避したオーク鬼が、それがスタートの合図だといわんばかりに3匹とも突進してくる。

幸い、両サイドの計4匹は見ているだけのようだった。

振り下ろされた棍棒を交わすため後ろに飛ぶ。自分がさっきまでいた場所に棍棒が突き刺さった。

同時に、オークの拳が左側から飛んでくる。

姿勢を低くして交わしたと思うと、オークの足が目の前にあった。

無理な体勢のまま、体をそらしてそれを回避する。

オークの足裏が鼻をかすめ、つーんと鼻腔が痛む。

「鍊金っ」

手早くスペルを唱えて魔法を放つ。

全力で拘束用の魔法を放つが、粘着性の物質にかわった地面をものともせず

一番最初に棍棒を振るったオークが再び棍棒を振るった。

「詰んでんだろお！これ！」

重力に任せて倒れて回避する。直ぐに後転して体制を建て直し、横向きジャンプして二匹目の拳をかわす。

ついでに姿勢を低くして3匹目の拳をやり過ごした。

「ぬ、ぬしよ、今から言う、呪文を・・・」

背後でぼこぼこにされているだろうウッドがそう叫んだ。

彼はMPとHPが一緒なのだとい前話されたことを思い出す。攻撃されすぎても、魔法を撃ちすぎても消えてしまいうらい。まったくをもつて中途半端な不死だった。

消えてしまった後は生者から生気を吸う以外の行動は出来なくなるらしい。

浮遊霊が自縛霊に格下げされてしまうということか。

どうでもいい思考をしていると、二つ同時に拳が襲い掛かってきた。反応が遅れる。

咄嗟に両腕で防御姿勢をとるが、ぐきりと嫌な音がしたと思うと背後にあつた樹に叩きつけられた。

呼吸が出来なくて咳をする。鉄の味が口いっぱいに広がった。

左を見る。薄くなったウッドが後ろに下がりながら呪文で何とかオーク鬼をけん制している。

右を見る。さつきにやにやこつちを見ていた棍棒を肩にあて、とんとんしながらこつちを見ている。

前を見る。もう死んだのか、と余裕の表情でオーク鬼が3匹近づいてきていた。

その背後のオーク鬼はウッドの方へ行こうとしているようだ。

視界を戻すとき、どこかで見た植物があつた。どうでもいいことだ

った。

急速に視界が暗くなっていく。

絶体絶命。まさか2度目の人生がこう簡単に終わるとは――。

> i 3 5 1 4 9 — 4 4 1 1 <

心の中にスペルが流れてきた。

しゃがれた声だった。ウツドが使い魔の通信を使っているらしい。消え入りそうな苦しげな声だった。

死を知らない存在ではなかったのか。今にも死にそうだ。

血の味しかしない唇がウツドのスペルをなぞる。

魔力がふつふつと煮える感じがする。折れた右手をかすかに動かし、杖を振った。

「グランド・スワンプ」

杖が光った。

昼なのに暗くなり始めた視界でも良く分かる光。

その瞬間、3匹のオークの動きが止まる。

相当驚いているようで回りをきよろきよろと見回していた。

身長がどんどん低くなっていく。

いや、低くなっているのではなかった。足元を見ると、彼らの周辺だけ沼地になっている。

全てを飲み込みそうな深い緑色をした沼。

右を見る。

さっきまで余裕だといわんばかりだったオーク鬼が、棍棒を手放し体が沈まぬよう樹にしがみついている。

それでも容赦なく体はしずんていつている。徐々に。確実に。

再生

「よくやったぞ、主よ」

首だけ動かして枯れ木の老人のほうを見た。

外傷はないが、どこか疲れた様子だ。

軽く見回すと、全てのオーク鬼が思い思いに沼から逃れようと必死に抵抗している。

「よしよし。主よ、気絶してくれるなよ。」

気絶したら主は2回目の死を迎えるようになるぞい」

いつもの軽口に対応するようにやりと笑ってやった。ウッドは満足そうだ。

「やっぱり、魔法を思い出す瞬間とは死に追い詰められた瞬間じゃないの」

「もつと早く気づいてれば・・・こうには、ならなかっただろ」

喋るたびに肋骨が響いた。

口の中にいっぱい血の味が広がって、ごほつと咳をする。

見事なまでに鮮やかな赤色がお粗末な服にべちゃりとついた。

「主よ、もう一度言うが気絶してくれるなよ？」

ワシが動きを封じられたあやつらにトドメを指したいところじゃが、今はコモンマジックがぎりぎりじゃ」

魔法の乱発とダメージのせいらしい。そういえば心なしか透明度が高い。

「死にそうだ・・・」

正直な話だった。全身が痛む。

「ふむ・・・。主は回復魔法が使えるのじゃったか」

「・・・おうよ。お前も、今の状態じゃ、無理だろ・・・」

「元主も回復魔法は普通にヒーリングじゃったしのう」

ぐおお、だとか、ぎいい、だとかおぞましい叫び声が響く中ウッドが首を傾げながら悩んだ。

着々とオーク鬼の体は地中に埋まっていつているらしい。

ちらりと見えるオーク鬼の体はもう下半身が見えなくなっていた。

「む、あれならいけるかもしれぬ」

ぽんと手を叩いた。

「元主はの、恒久的に自分にかけている魔法があつてのう。

一つはイーリスという魔法じゃ。水の薄幕を張る防御魔法での。

ま、オーク鬼の本気の一撃を防御できるかは微妙じゃが・・・」

「・・・ごたくはいいつて。頼む、死にそうなんだ」

「今死んでも、もうオーク鬼は襲ってこなさそうじゃが」

「グランドスワンプの効果が切れれば、地面は土に戻りそうだけど・

・・・」

「おお、そうじゃった。主は中々に頭が切れる。完全に窒息させるまで、回復はお預けじゃのう」

グランドスワンプ。

この呪文は非常に精神力を削る魔法だった。

魔法の範囲は分からないが、敵と認識した者の足元を底なし沼に変える呪文らしい。

ただの底なし沼ではないようだ。

意思を持っているように対象の足元を絡める。引きずる。

じゃないと怪力を持つオーク鬼が無理やり出てこれるはずなのだ。

本日何度目かの吐血をする。

体のほうが限界を向かえそうだった。今日は暖かいはずだが、肌寒い。

ひどい風邪を引いたときのような背筋の冷えを感じる。

前世の最期の記憶に似ていた。

「・・・まだか」

「もう首元。まあ、しっかり意識を持って、どーんとかまえんさい」

首を動かして右を見る。オーク鬼の姿は左腕と顔を残してもう全て埋まっていた。

苦しそうに左腕をばたかしている。

彼の命のもし火が消えるのは時間の問題のようだった。

「おっと、この時間を利用して『リジエネート』の魔法の説明でもするかの」

「・・・どーぞ、ご自由に」

いつかウッドは『若者は老人の話に耳を傾けるべき』と言った。

彼は話し好きなのだ。いつもどうでもいい話ばかりしようとする。

特に無駄話の中でも、蘊蓄を垂れ流すのが好きだった。

興味深い話もあるのだが、だいたいはどうでもいいようなものばかりだった。

「『リジエネート』。命の流れを活性化する魔法じゃ。『パラライ

ズ」の逆といってもいいかの。

自然回復力を飛躍的に上げる魔法なのじゃよ。自然に回復できん傷には効かんということじゃ。

腕がちぎれるだとかの」

不思議なことに五体満足だった。一つくらい欠損していてもいいくらい被害だったのだが。

感覚を確かめるために右足、左足をうごかす。痛みは殆ど無い。脚は元気だ。

逆に両腕はこつぴどく傷んでいた。

左腕が特にひどく、びっくりするほどはれ上がっていた。骨が砕けてるかもしれない。

「魔力さえあればさつき言っていたイージスと同じ、恒久的に作用する魔法での。

使用中も他の魔法が使えるが、重ねがけはできん。

元主はこの魔法を常に使っているせいで傷の直りが妙に早かった。よく怪人だと思われて、町人に恐れられていたの」

まっくろな瞳はどこか遠くを見ていた。

80年以上前のセピア色の思い出を探っているのだろうか。

いつもの大笑いとは違う、自然にもれたような優しい笑い声を小さくあげていた。

「・・・さて、主が本当に死にそうじゃ。グランド・スワンプを解除しなされ」

オーク鬼が顔まで埋まって1分強経過しようとしていた。

まだ解除しては、窒息しきれなかった者が襲い掛かってきそうだが。

「問題ないぞ、主よ。あれに全身飲み込まれればまず助からん。全身あの沼に漬ければ、口から気管やあらゆる臓器に泥が入り、一瞬で窒息させるじやろっ」

随分と苦しそうな魔法だった。想像してぞわつとする。

「・・・そうかい」

集中させた精神力をシャットダウンさせる。

思わず意識が飛びそうで、何とか飛ばぬように気をしっかり持った。今気絶すれば確実に次おきた時は天国だ。

いや、案外生まれ変わっているかもしれないが。

ぬぶぬぶと粘着質な音が周囲から聞こえる。

沼がオーク鬼を吐き出していた。

オーク鬼は泥に漬かっていたのにもかかわらず綺麗だった。傷一つないオーク鬼は力なく沼に吐き出された。

みな、寝ている様でもあった。

「では、ワシのスペルに続け。水の流れを意識しながらの」

魔力は底を突きかけている。

精神力切れの倦怠感と全身の痛みからくる、意識の飛びそうな感覚を押さえつけ、

ウツドの言うスペルに倣う。

「リジエネレート」

杖が優しい青色に包まれた。

体の痛みが少しだけ緩和される。

腫れた左腕がぴくぴくと痙攣したしたが、不愉快なものではなかった。

「主よ、気絶してもよいぞ」

「・・・どーしてだ」

「主が魔法を成功させたのじゃ。ワシの最後のなけなしの魔力で肩代わりしてやろう」

ウツドはヴィクトルの開発した魔法を使うことが出来ないようだった。

彼が言うには、理論が違いすぎて理解できないそうだ。

それでも一旦発動した魔法の魔力の肩代わりはできるらしい。さすが使い魔だ、と思いながら目を閉じた。

意識は10秒もかからず、暗い闇の底へ落ちていく。

従者

「おきたか、主よ」

目を開く。気絶したときと同じ体勢のようだ。

記憶に余り残っていないが、オークの倒れた位置も同じみだった。

「おはよう、ウッド」

姿が見えぬ使い魔に返す。

きよろきよろと首を動かした。暗い闇の中、彼の姿は見えない。

「どうじゃ、体はまだ痛むかの」

「ああ、腕は痛いな」

ぐつと力を入れて立ち上がる。

足は大丈夫そうだったが、両腕と、最後に殴られた胸に激痛が走る。思わずよろけて、踏ん張った。また激痛が襲ってうめき声を上げる。

「どこ行っただよ、出てこい」

「無理じゃ。ワシは今、主の影の中」

下を見る。二つの月が照らす影の下。確かにここから声がする。

「魔力を使い果たしての。主よ、内臓も大分傷ついていたようじゃが」

「内臓？・・・問題ないんじゃないか？」

「そうか。命に関わりそうな場所を集中的に回復させてよかったわ

い」

そんなこともできるのか。ヒーリングと使い方は同じそうだな。

「ヒーリングのように短期的に回復はできんぞ、主よ。

あくまでも自己回復力の増幅。長い間、できればおきてからずっと発動させるような

いわば『保険』のような魔法じゃ。怪我をしたときの『保険』じゃない」

たしかにこれをずっとかけていれば、傷を作った瞬間に傷が治り始める。

言いた表現だった。魔力を掛け金とした、怪我の保険。

「さて、主よ。魔力は回復しとるかの」

「若干な」

「リジェネートをかけることを薦めるぞい」

「ああ、そうするとすっかな」

目を閉じてリジェネートのスペルを呟いて発動させる。

優しい水が体を包んでいくような感覚だった。

激痛が少し和らぐ。たっぷり時間をかけて、さっきの体勢に戻った。

「今日は帰れぬのう」

「だなあ。腹減った」

首を動かす。

自分のもたれかかっていた樹の上に、旨そうな桃りんごが実っていた。

腹がぐう、と食べ物を消化したいと唸る。

残念ながらレベテーションの呪文を使うことは出来ない。
風の魔法の才能が全く無いからだ。お預けらしい。

「ぬ、食い物でも見つけたか」

「よく分かったな」

「こう見えても、腹の虫語検定1級じゃ」

「誰も取りに行かぬーだろ、その検定」

腹の虫の言っていることなんて「腹減った」くらいなもんだった。

「ほっほっほ。主よ、そんな姿勢で挑むと73級も受からんぞ」

「何級まであるんだよ!」

叫んで激痛が跳ねた。ぐうっと情けない叫び声を聞いてウッドが大
笑いする。

姿が見えなくても笑っている姿を安易に想像できた。

「ま、ワシのためでもあるしの。主が気絶している間、いいスペル
を思い出したんじゃ」

「何だ。言ってみろ」

「アテンダント。従者のスペルじゃ」

「従者?」

今自分の帰りを待っているであろうふわふわした茶髪の女性を思い
浮かべた。

それから、頭上の桃りんごと、彼女の桃りんごを比べる。頭上の方
の大勝利だった。

「水分で従者を作り出す魔法じゃ。ま、物は試し。唱えてみんさい」

痛む右手で杖を振りスペルを口ずさむ。
魔力消費に伴う倦怠感が体にのしかかった。

「アテンダント」

杖の先に半透明の水色の小人が座っていた。

小人という表現は違うのかもしれない。ただの人型だ。

手はある。指も。足もあるし、首も、顔もある。

ただどこにも起伏が無い。『非常通路』の標識の人間みたいだった。

「なんだ、こいつ」

「一匹だけか。まあ、主の今の状態じゃ、それで十分かのう」

質問に答えもせずほっほとウッドが笑う。

『従者』と呼ばれた水色の小人はぼーっと杖に座っている。

大体手のひらサイズのそれは、顔が無いせいで表情が読めない。

足の曲げている方向と、足の向きでどちら向きなのかはぎりぎり分かるのだが。

「よし主よ、そやつを頭上の桃りんごに向かうように念じてみなされ」

ん、と頷く。

従者は思ったとおりにぴこぴこと動いて、杖から落ちた。

べしゃ、と落ちたときに体のパーツが飛び散るが、すぐにずぶずと体が補完される。

魔力よりも集中力のいる魔法だと思った。

「目を離しちゃいかんぞ」

指示に従いちよこちよこ歩く従者を見る。

よいしょよいしょと言わんばかりに、結構な速さで樹をのぼってゆく。

現実離れた光景だ。

従者を視線で追うたびに首が上へ向く。じくじくと鈍い痛みが腹を突いた。

従者はついに桃りんごに到達したようだ。

必死に体全体を使い、桃りんごを揺さぶる。

30秒ほど揺さぶり続けて、ようやく桃りんごが落下した。

ずっと見続けていた自分は杖を持った右手でキャッチする。

キャッチする瞬間にしまった、と思ったが後の祭り。痛みに悲鳴を上げて、集中力が切れた。

桃りんごと一緒に落ちてきた従者がぱしゃつと小さな音を立ててただの水に変わった。

「ま、結果オーライじゃの」

「オーライなのか……。んで、なんだあいつ」

「あれは水を操る魔法での。分かりやすいから人型になっておる。

念じたことをしてくれる魔法人形といったところかの。欠点として、目に見えぬ範囲では命ずることができぬ。

集中力も相当必要じゃったろ」

「まあな……。もしかしてこれ、複数出せるのか」

「元主は30匹くらい引き連れておったぞ」

想像する。骨しか見たことのない天才メイジ、ヴィクトルが水色の小人と戯れているところを。

・・・大笑いしそうだった。どう見てもコメディだ。

一人で苦笑しながら桃りんごにかじりついた。

喉を焼くような甘さが、鉄の味に支配された口に広がって、涎がだ

らりと出る。

飲み込むと体が喜ぶように脳の芯がじーんと痺れた。旨い。

「うめえ」

「じゃる。あ、主が摂取したそのカロリーはワシの命に優先的に変換させてもらうからの」

「んだと？」

思い切りがつついたのですでに桃りんごは殆ど芯を残すだけになっていた。

「主が眠っている間、監視役が必要じゃろう」

「俺が眠ったら回復魔法もとけるだろうから、今日は寝るつもりは無い！」

「ほっほっほ。なら話し相手が必要じゃろう？」

「話せてるじゃねえか！姿が見えないだけ、今のほうがいいわ！」

叫びを無視してうつすらとウッドが姿を現す。

ほとんど透明だった。

「おお、やはり影の中は嫌なもんじゃ」

「返せ！なけなしのカロリーを返せ！」

「ほっほっほ。一日くらい食わんでも死なぬじゃろ」

「てめえは一生食わなくても死なねえだろ！」

最後の一口をかじりおえ、芯を地面に置いた。

どうせこれもこの老人の栄養となるのか。小さくため息をついた。

「しかし主よ、沼の底で息絶えた連中が今回のオーク鬼騒ぎの犯人じゃったようだの」

「だな。もつといっぱいいても不思議じゃないけど、襲ってこない様子を見るとそうみたいだ」

「主……。もつといっぱいいても不思議じゃないと言ったの？」

「ん、ああ」

「大馬鹿者が。もつとぎょうさんいると予想できたんなら、どうして首を突っ込んだんじゃ」

「や、すまん。驕ってた」

「ふむ。……ま、主の実力を過大評価して、止めなかったワシも責任があるのじゃがな」

ウッドは本気で怒っているようだった。
何だか、笑いそうになる。

「悪かったよ。ま、最後よければ全て良しつてな」

「ほっほっほ。じゃな。……にしても、ヌシは考え無しじゃのう」
「お前もな」

ウッドが大笑いして、釣られて笑った。
二つの月が星空に綺麗に輝いていた。

傭兵

「主、主よ」

「・・・んが」

体を揺さぶられて目が覚める。

ぼーっと体を動かして、揺さぶられた肩を見た。

枯れ木みたいな指が食い込むように血に汚れた肩を掴んでいた。

ウッドと中身の無い会話をしているうちに眠ってしまったらしい。

小鳥がちゅんちゅんと無き、空気が澄んでいる。

二つの月はすでに消えていて、真っ青な空に風変わりしていた。

「すまん、寝てたか。寝ないつもりだなんて言ったが・・・」

「いや、それはどうでもよい」

ウッドの様子は神妙だった。肩を揺すっていた左手とは逆の手に、大きく膨れた麻袋を握っていた。

「なんだ、それ」

「こりゃ、オーク鬼達の犬歯じゃ。倒した証拠が必要かと思つての、それより」

区切った。真っ黒な目が二つついた、扱けた顔が近づく。

「誰か、複数人の人間が来たようじゃ。歩けるかや」

「マジかよ」

討伐に来た傭兵かもしれないと思った。

まともな連中ならいいが、傭兵は山賊を兼業している者も多い。

弱った自分を見て、何をされるか分かったものじゃない。
手柄も横取りされる恐れがある。

「主、魔力は回復しとるか？」

「少しだけな」

言われる前にリジエネートを唱える。

左腕をみると、随分腫れが引いてるようだった。

「うむ。どのくらい攻撃魔法が使えるかの」

「魔力的には大丈夫だが、パラライズは無理だな。左腕が動かん。
ウォーターカッターはいけるだろ。・・・グランドスワンプは地
球がひっくり返っても無理」

正直な感想を述べた。何も言わずウッドが頷く。

いつもは向こう側が見えないくらい濃い彼の体が向こう側がしっかり見えるほど薄い。

魔法を使うことは到底無理そうだった。

「透明化の魔法があるんじゃが、無理そうじゃのう……。しかたがあるまい、移動するぞ」

ウッドが手を差し伸べた。

それを掴む。存在感とは裏腹にしっかりと右手に感触が伝わった。
冷たい。

「ぐう……。よっこらしょ」

「オッサンじゃな」

「まだ13だ。老け顔だけだよ」

座ったまま眠った腰が痛い。
肋骨や両腕の激痛よりも大分ましだが。

「では、行くか。慎重にの」
「おうよ・・・」

よたよたと歩き始めたときだ。
待て、と大きな声が聞こえ、体をびくりと動かす。

「待て、そのメイジよ！」

まずい。と思いながら振り返った。
汚い格好をした山賊を想像した。褐色肌の、薄汚れた皮の鎧に身を包んだ山賊を。

が、想像とは裏腹に身なりのよさそうな兵士風の男だった。
数は5人。皆装飾を施された豪華な鎧を身につけ、腰にはレイピアのようなものを引っ掛けている。

トリステインの騎士隊のレイピア型の杖のようだった。

「大丈夫か？」

5人の中で最も位が高そうな男が足早に近づいてきた。
敵意が無いようだ。本気で心配そうな顔をしている。
20後半くらいで痩せ型の短髪の男だった。肌は女性のように白く、赤色の強い茶髪が小さくなびいている。

「お触れを見てオーク狩りに来た傭兵か？」
「そ、そんなところです」

男は無言で肩を貸してくれる。

これ幸いと小さく例を言つて肩を借りた。
中世的な印象とは裏腹の、大きな肩だった。

「私達はツエルプストー様より編成された討伐隊だ」

「あ、じゃあ、お触れは取り下げられたんですか」

あの店主のヤツ、何が2、3日だ。思いっきり翌日じゃねえか。
悪態づく。ツエルプストー家は領民を大事にしている領主らしい。
迅速な対応だと思った。

「確かに取り下げられたが……。とりあえず治療を受け、領主様に会つといい。」

私が乗ってきたグリフォンで運んでやろう」

元氣付けるように男が微笑んだ。引きつる笑顔でそれを返す。

「よし、お前達、事情は飲み込めたか」

部下らしき人間に言う。全員がそろつてはい、と大声で返事を返した。

「グリフォンがいるのはもう少し向こうだ。すまんが少し我慢してくれ」

頷くと男がゆっくりうごく。怪我人たる自分を気遣ってくれているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5483y/>

ゼロの使い魔-893の使いっぱしりが転生したら-

2011年11月16日23時34分発行